ORIENTEERING JAPAN

O-JAPAN

Navigation across Country

'95 / 4

1995年［平成7年］4月10日発行
（毎月1回10日発行）
第12巻第4号通巻第141号
昭和63年6月24日第三種郵便物認可

うさぎ　コース5.5Km

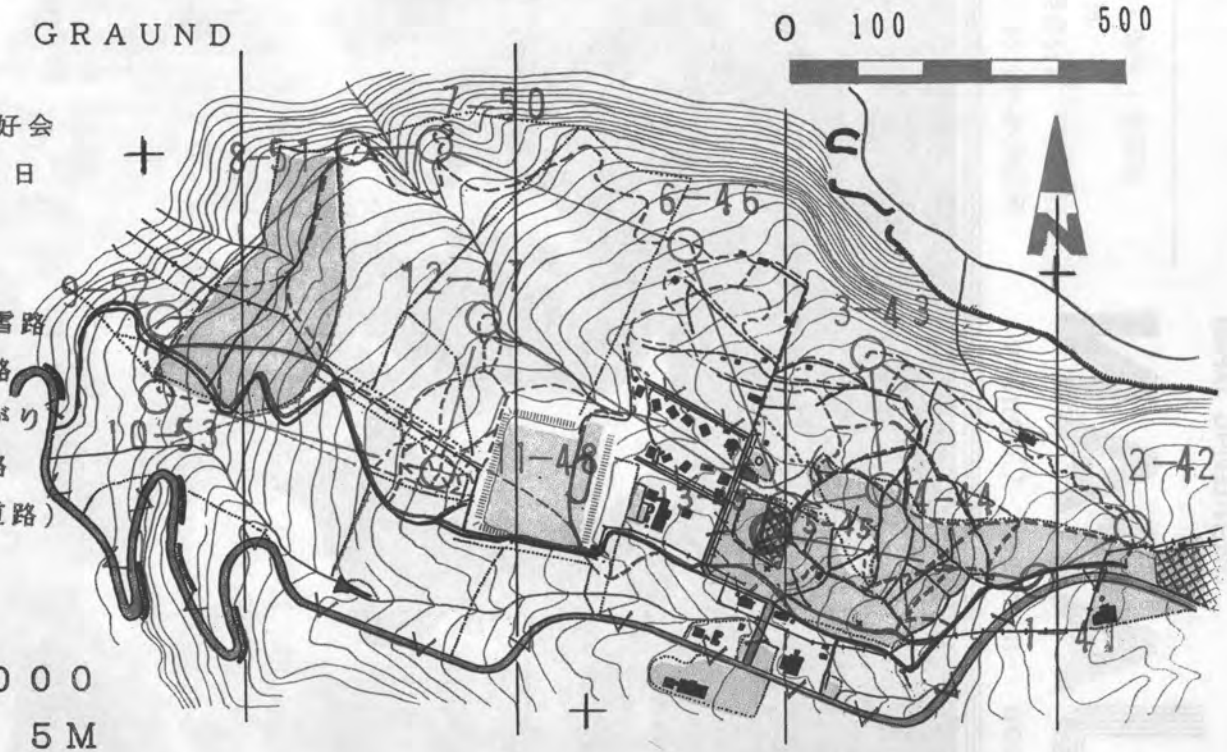
「グリーン　グラウンド」

GREEN GRAUND

山形県上山市蔵王坊平高原

ZAO LIZA SKIWOLD

SKI－O普及同好会
平成7年3月21日



——— 幅2m以上の圧雪路
- - - 幅1~1.5mの圧雪路
……狭く柔らかい曲がりくねったスキー路
ヴ—ヴ 無雪道路（除雪道路）
スキー場

縮尺　1：10，000
等高線間隔　5M

この地図は、スキーオリエンテーリング普及講習会に使用するため、秋田営林局蔵王森林センターの森林基本図を基礎として調査・作図したものです。

調査期間：　平成7年1月～3月　　調査・作図・印刷者：　武石　泉市

ORIENTEERING JAPAN
O-JAPAN

O-NEWS HEADLINES・O-NEWS HEADLINES・

＜第２１回全日本大会＞

Ｈ２１Ｅ・鹿島田浩二選手優勝！
ついに村越選手の連覇を阻む
Ｄ２１Ｅ・木植早生選手３連勝

◇◇◇◇◇

第２１回（平成６年度）全日本オリエンテーリング大会は，去る３月26日に栃木県矢板市で開催され，小雪の舞う寒さのなかで熱戦が繰り広げられた。詳報は次号でお伝えする。

＜編集部＞

スキーオリエンテーリングを
冬季五輪へ！

＜ＩＯＦ　ＮＥＷＳ＞

1998年長野冬季オリンピック
とスキーオリエンテーリング！

この見出しにはいくらかの条件を必要とする。読者のみなさんがご存知のようにスキーＯは1998年冬季五輪の公式種目にはなっていない。以前の“デモンストレーション種目”という概念も廃止されたことも知られている，すなわち完全なオリンピック・スポーツとなるか，否かということである。

しかし，長野組織委員会がＩＯＦに寄せた連絡によると，冬季五輪に関連して一連の高度な国際大会の開催によってスキーＯを導入することに関心があるということである！　日本側のスポンサーの考えも一致しており，近々ＩＯＦと負担割合についての折衝がスタートすることになった。

この企画の実現は，2002年のオリンピック正式種目へスキーオリエンテーリングを，という運動をしっかりと支えることとなるであろう。

From "ORIENTEERING WORLD"1995 No.2

＜訳・編集部＞

■今月の表紙：第17回インカレ・団体戦女子(95.3.12)，津田塾大学のウィニングラン ＝ 左から，三宅・千葉・伊藤の各選手。
［撮影：桐田　幸宏氏］

■今月の地図[2 ページ]：３月19～21日，山形県蔵王坊平で行なわれたスキーＯ講習会・ミニ競技会で使用された Ski-O map。
［提供：武石　雄市氏
＝調査・作図・印刷者］

９５／４月号・No.１４１　　目　次

＝ＳＫＩ－Ｏ＝ … 4
・ＩＯＣが国際オリエンテーリング連盟と会談
・スキーＯ講習会＆ミニスキーＯ競技会

＝ＥＶＥＮＴ　ＲＥＰＯＲＴ＝ … 5
・ハイテクＯＬ見た！　小沢　保昭
・第１７回早大ＯＣ大会　佐藤　征男
・第３回高連競技会　高橋　義広

＝インカレ９４（前編）＝ … 6-15
・第１７回
日本学生オリエンテーリング選手権大会
岩出　雅人・上村　紀子・桐田　幸宏

＝大会運営学＝ … 16-17
・第７回：コンセプトとアイデンティティ　池ケ谷悦朗

＝オリエンティアのための Medical Advice ＝ … 18-19
・⑦故障について［その 2］　愛場　庸雅

＝情報あれこれ＝ … 19
・長野県ＯＬ協会　平成７年度合宿情報

＝お知らせのページ＝
・「阪神大震災」多額の義援金ありがとうございました
・長野県ＯＬ協会　今後の大会等の予定について
・ＰＣ情報　・大会要項等の綴込みについて … 20
・編集部より

STREAMER

私の居住する自治会，輪番制をとっている役員が10数年ぶりに回ってきた。地域のレクリューションとして，２年前までオリエンテーリングもどきの催しを５～６年連続で指導してきたが，ストリートＯに近くなってきて，形式・方法やコース設定などに限界を感じ，今は身近なハイキングに替わっている。このような理由以外に，地域住民の‘静かな生活環境’を私自身同じ住民の立場で考えた時，あまり住宅地に近いところでの，つまりストリートＯは‘普及’の面からもあまり好ましくないと思い，この催しにはあまり固執しなかった。今年度，地域に戻り（私のオリエンテーリング活動は30才前後から既にかかわっていた自治会活動のなかから始まった），まだ１週間にも満たないが近隣の身近な人々との話合いのなかで，その「地域住民」の立場でものを考える重要さを痛感している。オリエンテーリング競技会は，その会場となる地域の森や道路を使って行なわれる。森はその地権者への借用願いが，その組合等を通じて文書でなされたりする。時には自治会にお願いする場合もある（本誌93/12 佐藤征男氏の「森林について正しい知識を持ってほしい」参照）。直接踏み込む森林の借用については別の問題として考え，ここで私が言いたいのは，特に都市近郊の会場周辺や，駅から会場への，会場とスタート／ゴール間の誘導路は住宅地である場合が多いのではないだろうか。いくら公道とはいえ，違反駐車があったり，話し声や視線を遮ることはできない。休日は他に気を使わずに静かにのんびりと過ごしたいと思っている者にとって迷惑なことである。ナイトＯなどは，その危険度から考えてあまり森を使わずに，「里」や住宅地に近いところで行なわれることが条件のひとつにあるが，この場合は前記に加えて競技の場も地元に迷惑をかける恐れがある。それではどうすれば？問題提起したい。皆で考えよう。

＜編集責任者・田　口　　肇＞

ＩＯＣが 国際オリエンテーリング連盟と会談

国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）メンバーのグンナール・エリクソン（スウェーデン）とペテル・タリバーグ（フィンランド）の両氏は，同スポーツディレクターのギルバート・フェリ氏と共に国際オリエンテーリング連盟（ＩＯＦ）メンバーと会見し，更に‘スキー・オリエンテーリング’を直接に視察した。フィンランド・オリエンテーリング連盟および同国オリンピック委員会のゲストとして，ＩＯＣメンバーはスキーＯの説明を受けたのち，1995年スキーＯ・ワールドカップの長距離競技の決勝戦を観戦した。

ＩＯＦサイドのメンバーは，代表としてスー・ハーヴェイ会長，評議会メンバーのエイナール・ウンスタド（ノルウェー），スキーＯ運営グループの議長ヴェリーマルク・コルテニエミ（フィンランド）と事務局長のレンナルト・レヴィンの各氏であった。

イヴェントに引き続き記者会見，さらに，かつてスウェーデン統治の時代にロシアとの辺境地帯であった，往古の絵のようなサヴォリナ城においてレセプションと表彰式が行なわれた。

アリア・ヌオリオヤとライノ・ペスの勝利を讃えた後，ギルバート・フェリは森に出て，彼自身でしばらくスキーＯにトライした。たとえスノー・スクーターに乗っていたとしても，地図読みに挑戦する姿は注目を浴びていた。

この会見は，スキーＯの冬季オリンピック・プログラムへの導入 の ために，ＩＯＣへの申請の援護活動の一部として設定されたものである。フットＯが，すでに満杯になっている夏季オリンピック・プログラムの改変がなされないかぎり，そこへ割り込んでいくチャンスがほとんど無いのに対し，冬季オリンピックの状況は少し違っている。種目は大幅に少なく，競技者の数もより処理しやすいと言えるのである。

［3月27日付けで，ＩＯＦ事務局より "PRESS RELEASE"として電信されてきたものである。 ＝編集部＝］

＋ ＋

スキーＯ講習会 ＆ ミニ スキーＯ競技会 成功裡に終了

去る３月１９日〜２１日にかけて，山形県の蔵王坊平のライザスキーワールドで行なわれ，無事終了した。参加は３１名（男２４，女７名）で，２泊３日の間，熱心にそして真剣に受講し，その成果は今後のわが国におけるスキーＯ普及の再スタートとなるものと思われる。

講習は，講義・実技ともパトリック・パウエル氏により，内容のある密度の濃いものであった。

なお，期間中に地方紙・局ではあるが新聞・ＴＶ（計３社）の取材があり，スポーツ欄に大きくとりあげられ，ニュース報道で異例の長い時間放映された。

主催は「スキーＯ普及同好会」（代表 山形県ＯＬ協会事務局長　武石雄市氏）講習スタッフおよび受講者は次のとおり。

スキーオリエンテーリング

普及めざし講習会

蔵王坊平

自然に親しみながら、クロスカントリースキーを楽しむスキーオリエンテーリングの講習会は二十日、県内で初めて蔵王坊平で開かれた。県内外から集まった参加者たちは、前シーズンまで世界レベルの選手として活躍してきたパトリック・パウエルさん(二〇)の指導のもと、滑走法や地図の見方などを学んだ。

スキーオリエンテーリングは、北欧などで盛んに行われているスポーツ。クロスカントリースキーを使い、コース上に定められたチェックポイントを通過し、ゴールを目指す。日本での知名度は低いが、長野オリンピックに合わせ、「国際スキーオリエンテーリング大会」（仮称）の開催が決まるなど、徐々に関心が高まっている。講習会は、この大会に向け、選手や指導者の育成を図ろうと、県スキーオリエンテーリング普及同好会(武石雄市代表)が企画した。

講習会には、愛知県や神奈川県、岩手県など県外を中心に、三十一人が参加。オリエンテーリングの経験はあるが、クロスカントリースキーは初めての人ばかり。バランスの取り方に戸惑いながらも、晴天のもとで、快い汗を流していた。石川県金沢市から参加した孫田三郎さん(七〇)は「しっかり技術を学び、石川でもこの競技を広めたい」と話していた。

スキーオリエンテーリングを学んだ参加者たち

3月21日付け 山形新聞より

［講　師］パトリック・パウエル
　　　　武石　雄市，　長谷川　剛
［通　訳］丸山　哲史
［補助員］武石　ケイ子
［受講者］（順不同）

高島　和宏（青葉会），酒井　克明（調布OLC），酒井かよ子（ヤマモモの会），孫田　三郎（金沢OLC），青木　卓也（千葉OLK），高原　進（神奈川県藤野町），杉山　光正（所沢OLC），田代　雅之（OCワンダラーズ），信原　靖（岩手大学OLC），遠藤　益夫（京葉OLC），安斎　秀樹（仙台OLC），鈴木　武（山形OLC），利光良平（東村山市），国沢　五月（トータス），塩沢　美緒（トータス），荻田　育徳（朝霞OLC），福士　淑子（東京HRC），高橋正樹（鳩の会），茅野　耕治（OCワンダラーズ），片山　秀昭（OLC レオ），山田一善（多摩OL），柴田　達真（東北大OLC），田島　利佳（みちの会），清水潔（横浜OLC），濱田　由紀（東京HRC），岡崎　宗康（東北大OLC），目黒　一夫（練馬OLC），酒井　佳子（札幌農学校），渡辺　里香（山形県OL協会），佐々木修（山形県庁），小林　岳人（京葉OLC）

ハイテク ＯＬ見た！

ブーイングの無いのは？

中京ＯＣ　小沢　保昭

第３回全日本 ﾘﾚｰ ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ選手権大会では，かねがね推奨してきました「自動計測」を実施し多数の方に体験して頂くことができました。新しいこと，目に見えないことには不安を感じるもので，ﾃｸﾆｶﾙ ﾐｰﾃｨﾝｸﾞでは多くの質問を受けました。運営する方も不安で，どこか気づかないところでトラブルが起こらないか，予定時刻に順位を確定し表彰式を終わるまで，緊張は解けませんでした。成績に関する苦情は皆無で，果たして成功したと考えて良いのかな，と半端な気持ちになっています。成功したとすれば，器材は借用品ですから，ソフト開発したインカレ運営の経験豊富なプログラマー新帯さんに負うところ大です。

ﾃｸﾆｶﾙ ﾐｰﾃｨﾝｸﾞでの質問にありましたことに若干補足しますと

＊タイリス…TIRIS‥Texas Instruments Registration and identification System　このシステムの商品名です。

＊センサー…今回は用語の混乱を防ぐため ｾﾝｻｰ としましたが，機能としては衛生放送などで使用している電波の中継器　で ﾄﾗﾝｽﾎﾟﾝﾀと言う方が正しい表現です。 32.5xφ3.85mmを防水 ｹｰｽに入れ，更に樹脂 ﾁｭｰﾌﾞ で保護して水泳着用の布に縫い込んであります。重さ0.8ｸﾞﾗﾑ，ﾒﾓﾘ数量・10進法で20桁，読取り速度100msec，通信周波数134.2kHz

＊読取り器… ﾉｲｽﾞﾚﾍﾞﾙ の ﾃﾞｼﾞﾀﾙ 表示があり 500以下と低く抑えないと感度が悪くなり，ｱﾝﾃﾅを直接触れる様にしないと読み取れなくなります。そのため，ｱﾝﾃﾅを大きくすると読取り距離は広くなるとともに，より広く ﾉｲｽﾞを集めてしまいます。また， ﾀｲﾘｽ を近接させて並列設置すると相互干渉があり ﾉｲｽﾞﾚﾍﾞﾙ は高くなります。その他電磁誘導を起こさないように， ﾊﾟｿｺﾝ の配置，ｱﾝﾃﾅﾘｰﾄﾞ 線が読取りしない様に配線，磁性材料使用しない…読取り器の架台は樹脂 ﾊﾟｲﾌﾟにしました。ﾊﾟｿｺﾝを用途別に準備したなら多方面の応用が考えられます。

□

今回の体験を基にハイテクＯＬを発展させてくだされば幸いです。

EVENT REPORT

第１７回 早大ＯＣ 大会

１９９５年
□ ２月１９日
（日）
晴れ
□千葉県君津市
ﾘﾎﾟｰﾄ：佐藤　征男
（水戸ＯＬＣ）

今回も早発ちだ。午前４時起床。静かに寝床を離れて着替え，家族が寝ているのを起こさないようにしながら午前４時15分家を出る。常磐線赤塚駅一番の上り鈍行電車は４時34分発。駅の切符販売は午前６時からなので，この時間では自動切符販売機だけとなってしまう。そこで昨日スーパーホリデイパスを 4000 円也で購入しておいた。ＪＲの料金計算によると東京経由で久留里線おびつ駅まで往復 7000 円だから５７％の運賃で済む特別割引切符である。昨年東大大会の帰りにこの切符のあることを知り，もっぱら往復 4000 円以上のところに行く時に利用している。この切符は不思議なことに市販されている大型の時刻表にも案内は無いが，駅の窓口で購入可能な特殊な切符の一つである。特急列車などにもそれなりの料金を払うと乗れるから便利であるが，利用期間は当日のみとなっているのであまり遠くへ行く時には，使い方を考える必要があるだろう。クラブの渡辺さんは午前３時に起きて，勝田駅始発４時21分の電車なので駅まで奥様に車で送ってもらったという。遠くの大会だと何かと大変である。友部駅からは日立工機ＯＬＫの高橋さんと一緒になる。茨城大ＯＬのメンバーなども乗り込み車内は結構にぎやかである。上野駅着６時28分で東京駅発６時47分の京葉線快速に乗らないと連絡が旨くいかないので，乗換え時間は19分しか無い。走る走る。東京駅の長い長い乗換えもエスカレーターの上を走る。やっと京葉線ホームに辿り着き，発車間際の快速電車にすべりこみセーフである。これで総武線蘇我駅で内房線の鈍行電車７時38分発に間に合った。木更津駅到着８時10分，久留里線は８時17分発でおびつ駅到着８時54分。徒歩で会場の中学校到着９時15分であった。自宅を↗出発してから５時間ちょうどであった。

こんなことで，帰りは帰りで，明日からの仕事のことが頭の中をかけめぐり木更津から，さざなみ１６号を東京まで利用して赤塚駅到着18時35分。乗換えは行き４回，帰りは３回であった。今日一日のＯＬ行は14時間20分のうち１０時間近くを往復の電車や乗換えなどに使っていたことになった。ＯＬの競技会場にいた時間より遥かに長い。これではＯＬ大会出場より，かつてＪＲが宣伝していたレールオリエンテーリングにでもなりかねない１日だった。

成績はM50Ａクラス第３位入賞，激戦のこのクラスで久しぶりにメダルを手にした。

第３回 高連 競技会

１９９５年
□ ２月２６日
（日）
小雪
□埼玉県日高市
ﾘﾎﾟｰﾄ：高橋　義広
（京葉ＯＬＣ）

高校生の主催する大会で NEW テレインを開発し，実施できたことはすばらしいと思います。

マップ名は「高麗白銀平」，会場は越生の手前の毛呂山公園体育館。個人クラス：③ Blue 5400m に参加。テレインはプログラムで紹介されているとおり，「全体的に手入れの行き届いた綺麗な林が多く，山林面積が狭いものの，植生はなかなか良好である」。参加者の何人かが，良質のテレインで，雪の中，参加した甲斐があったといっており，私もそのように思った。ただ，地図の中央ににくいゴルフ場が２つあり，８の字のようなテレインで，コースの組み方に制約がありそう。

この大会で残念に思ったことは，事前エントリーが 142名と少なく，当日は雪のためか，更に３分の１ぐらいが不参加で寂しいイベントになった。暖かい更衣所と熱いシャワーまで用意しているのに，もっと参加者がいても良いと思う。私の子供よりもっと年下のあどけない顔をした子供たちが懸命に運営していたが，収支は大幅な赤字だろうと気の毒な気がした。ＯＬの発展のためにも，若年層の主催する大会には極力参加するよう，多くのオリエンティアに望みたい。

また，マッパーは，今回のように正方形の地図を作らず，Ａ４サイズにしてコストを安くするよう考慮すると良いでしょう。経費計画もよく検討して，次回もすばらしい大会を開いてください。

全日本 ﾘﾚｰ大会会場への忘れ物（Tｼｬﾂ・ｼﾞｬｰｼﾞｽﾎﾟﾝ・ｿｯｸｽ 他 30 点ほど）があります。H7年４月30日まで保管しますが，その後は廃却処分といたします。お心当たりの方は愛知県オリエンテーリング協会（TEL 052-241-9101 ）へご連絡願います。

第17回日本学生オリエンテーリング選手権大会

インカレ94（前編）

取材　岩出雅人（写真・ビデオ）
上村紀子（ビデオ）
桐田幸宏（写真/レポート）

去る、平成7年3月10日（金）～12日（日）、第17回日本学生オリエンテーリング選手権大会（インカレ）が、静岡県富士市・富士宮市・裾野市・山梨県南都留郡河口湖町を会場として開催された。標高の高いテラインでは、50%以上に積雪の残る厳しい環境。当日の雪が心配されたが、幸いに天気は良好。学生選手権に申し分ない条件のもとで選手たちの激しい闘いが繰り広げられた。11日の個人戦。男子は大本命の東北大4年・入江崇が実力通りの力を示し、昨年に続き2連覇。女子はこれまで4年生に阻まれて2年連続3位を続けてきた静岡大4年・金田収子が最後のインカレで見事栄冠を射止めた。12日の団体戦。男子は本命東北大学がアンカーで崩れ、たなぼたを待っていた筑波大学がその作戦通りに優勝。リレー導入後の初優勝を飾った。女子は、3強といわれた、筑波大・静岡大・広島大が崩れる中、1走から快走を続けた津田塾大学が優勝。男女ともアンカーでの素晴しい逆転劇を演じてくれた。今月号では団体戦を中心に報告記事を掲載する。個人戦の詳細や、活躍した選手たちの原稿は次号で。

注：原稿執筆期間がきわめて短期間だったため（インカレ終了後10日間）、一部の有力選手・有力校に取材ができませんでした。特に静岡大学・千葉大学・東京工業大学は、全くコンタクトをとれず申しわけなく思っています。できれば、次号で取り上げたいと思います。今月号においては、片手落ちのリレー展開報告となっていることをご了承ください。

個人戦速報

男子　入江崇・二連覇　／　女子　金田収子・初優勝

男子表彰式。上段左から、松沢俊行・入江崇・藤城公久
下段左から、内田恵司・小林哲・野田昇作

個人戦男子・成績

			11000m	up480m	
1	入江　崇	東北4	1：22：29		＊
2	松沢　俊行	東北4	1：24：38		＊
3	藤城　公久	筑波3	1：26：43		＊
4	内田　恵司	北大4	1：28：01		
5	小林　哲	静岡4	1：29：24		＊
6	野田　昇作	北大3	1：30：07		
7	吉村　年史	広島4	1：31：28		＊
8	太田　晃弘	東京2	1：31：33		＊
9	安良　和寿	筑波4	1：32：47		＊
10	野中　俊樹	東京4	1：32：57		＊
11	村上　泉	東農4	1：34：57		
12	岡安　隆史	千葉4	1：34：59		＊
13	加曽利正典	筑波2	1：35：05		
14	佐々木良紀	千葉4	1：35：16		
15	太田　宏樹	東工4	1：35：41		
15	山内　亮太	早大3	1：35：41		＊

＊：シード選手

個人戦女子・成績

			6700m	up260m	
1	金田　収子	静岡4	0：59：14		＊
2	山口　純子	名大3	1：01：49		＊
3	志村　聡子	早大4	1：04：31		＊
4	三宅　朋美	津田4	1：04：36		
5	小山由美子	筑波3	1：06：12		
6	林　ゆかり	筑波3	1：06：22		
7	原　志保子	静岡3	1：06：43		
8	奥田　裕子	京女4	1：08：36		
9	稲村　仁美	広島4	1：08：38		＊
10	片岡由起子	筑波3	1：08：42		
11	中野　宏美	静岡4	1：09：53		
11	染矢　和子	千葉3	1：09：53		
13	小林るみ子	新潟2	1：10：44		
14	千葉あかね	津田4	1：11：08		＊
15	山本　康世	ICU3	1：11：10		

＊：シード選手

女子表彰式。左から、山口純子・金田収子・志村聡子
三宅朋美・小山由美子・林ゆかり。

団体戦男子　筑波大学、リレー制で初優勝

3年ぶりの七夕作戦大成功

男子団体戦は、東北大学が大本命。個人戦で1・2フィニッシュを決めた、入江・松沢の2枚看板が大きく光り輝いていた。同じく個人戦で4位・6位を輩出した北海道大学も注目。昨年度4位入賞した勢いをもって今年の活躍も期待された。

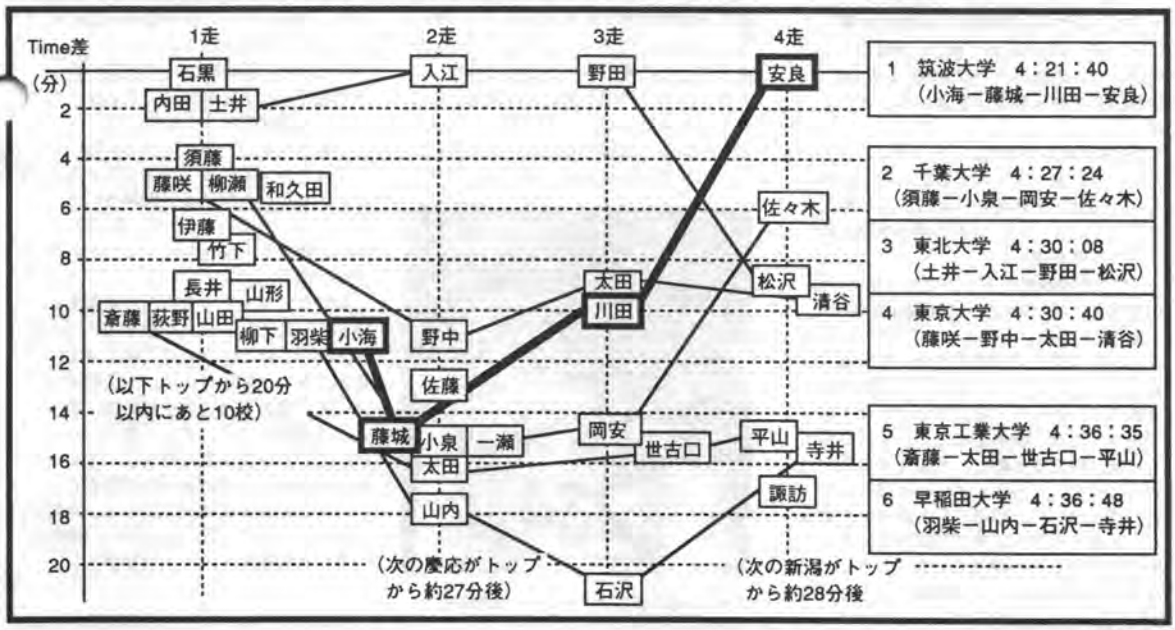
前日に提出されたオーダー。東北大学・入江の2走が注目を集めた。東大オフィシャルの鹿島田は、「東北、意外なオーダーだな」と思ったという。入江の2走は予想しなかったそうだ。ここ数年、常に東北大学と優勝を争ってきた東大。オーダーは、<藤咲ー野中ー太田ー清谷>。「東北をみてた面もあるけど、中盤に2人のエースを置かないと展開として不だと思った。1走の藤咲は、東大の中でうまくて、信頼の置ける人。4人目が不安な清谷。チームでは中心的な存在で一番トレーニングもしてたけど実力的には4番目。でも4走はもう展開が終わってるハズなので2走・3走より走りやすい。2走・3走は、野中は（リレーを走った）経験があるので、太田が走りやすいほうということで本人が3走を選んだ。2走のほうが情報が突然飛び込んでくるんで難しい。東北はいつもエースを後ろにもってくるから、3・4走が、松沢ー入江 or 入江ー松沢だろう。松沢が4走ならば、もし東大がリードしていれば、焦るかもしれないと思ってた。（鹿島田）」。

一方東北は。松沢自身の目を通して語ってもらった。「土井と野田は前半を、入江と僕は後半を希望していた。土井については1走はできるだろうし、本人の意思も固かった。野田は後ろに入江と僕がいるほうが安心とは言っていた。入江は4走のつもりだったが僕もやりたかった。最終ランナーは役割が明確だし、かえって落ち着ける。結局僕が4走やらせてもらうようになった。高島さん（オフィシャル）は、どっちがやってもというのはあったが、話を聞いてくれたというのと、入江に対しても入江といい勝負できるようになって入江を安心させることできるようになったし、入江もそう思ってくれると思った。野田は一番安定感が欠けるので2人で挟んだほうが安心できる。3走でトップでなくても勝負できるオーダーだった。団体戦走るのは初めてだったので、わがまま言ったけど、今回は自分の主張を曲げないでいこうと思ってた。それでチームが強くなると思ってたので、4走にこだわってたのは良かったと思っている。周りはみんな4走は入江だと思ってるのをニヤニヤして聞いてたが、でも部内でもそうだったのは、“部内でもみんな入江のほうが安心できるのかな”と、穏やかではないところもあった。でも早稲田のような大きな大会でも勝てたので心配することはなかった」。

レース展開は、1走でまず飛び出したのが新潟大学だった。真剣に入賞を目指していた新潟大学。1走・エースの石黒選手が部員の期待を裏切ることなくトップで帰ってきた。「夢を見せてくれた」と後にオフィシャルの元木は語っている。続いて1分弱あとに前日個人戦4位の北海道大学・内田選手、東北大学・土井選手と続く。北海道大学も夢を見たのか？2走・大川選手はとてつもないスピードでスタートを切っていた。東北大はエース入江が出る。そこから3分ほど遅れて、千葉大・須藤選手、更に1分ほど遅れて、東大・藤咲選手、京大・柳瀬選手、静岡大・和久田選手と続いた。予想された有力校が無難に帰ってきていたが、唯一筑波大が出遅れた。トップから離れること約10分。17位で小海選手がゴールする。

前日にメンバーが決まった筑波大学だが、「俺はもう去年のインカレ終わったあとから1走しか考えてなくて、俺が走ったのはみんな意外じゃなかったと思う。1走ははずしたことなかった。前日もスペシャリストとして発表されていた（小海）」。小海選手はスタート前に自分が緊張していないのがわかったという。

1走トップゴール。新潟大学、石黒選手から佐藤選手へ。



「自分のレースできると自信もってレースしてた」8番までは東北の土井選手と一緒だったらしい。「土井のすぐあとに帰ってくるのが自分の仕事だと思ってた」。9番で藪の角からアタックしたのがずれた。その1つが8分くらいあるらしい。「それだけだから悔しくて……」。

筑波は前日3位・シード選手だった藤城選手がスタートする。「とりあえず、タッチを受けた瞬間に昨日と同じだと思った。速い選手がみんなでばらってて、追い上げるだけ。精神的にすごく楽だった。関東インカレは1走でぶっとんでたんで、今回は小海さんがその役をやってくれた。レースは、取り返そう的な考えはしなくて、昨日と同じ考えで。スピードコントロールに勝てないんで、スピード出さないようにした（藤城）」。3番の周辺に遅いパックがいたらしいが、「ほっとけー」と思って抜いて行く。11番で千葉大と東工大が競っているところに追い付いたようだ。東工大はどこかへ消えて、最後まで千葉大と一緒。最後の道ばしりで勝ったそうだ。京都は13番で抜いたという。

2走は入江がとてつもないタイムで2番手以降を大きく引き離してゴールした。実に11分の間隔を開けて、2位に東大・野中選手、その2分ほどあと、3位に新潟大・佐藤選手。新潟大は依然として大健闘を続けていた。しかし佐藤選手のゴールは、同じ新潟大女子の2走ゴールの直後だった。女子の3走を送ることに集中していた元木オフィシャルは、男子3走・本間選手へ声をかける時間がなかったという。ものすごい勢いで出ていく本間選手を見て「しまった」と思った。新潟が入賞を逃した敗因をそこに悔やんでいる。

さらに1分強あと、4位で筑波大・藤城選手、5位で千葉大・小泉選手、6位で京都大・一瀬選手と続く。さらにさほど変わらず、7位で東京工業大学・太田選手が続いている。東工大も期待通りの健闘を見せていた。更に1分強あけて8位に早稲田大・山内選手。次の慶応までは9分近くあいた。早稲田までが入賞争いを演じることになる。

2走終了時点での2位・東大だが、「入江があんなけ速いタイムだしたんで、3走からは、筑波・千葉あたりにちゃんと勝とうということで、3走・4走は選手を送り出していた（鹿島田）」

さて3走の展開。トップで出た東北の野田選手と、2位の東大・太田選手はおそらく全く1人でのレースとなったのだろう。3位で出た筑波の川田選手が全く太田選手は見なかったという。「すぐに千葉大の岡安がきちゃったんで、先に行かせようと思って止まったら、彼も止まった。すごいゆっくりで、向こうも同じこと考えてたみたいだったんで、「ちきしょー」と思ったけど、まあいいや（川田）」と始まったようだ。2番でつぼって再び岡安選手にあう。3人で2分くらいつぼってたというから、もう一人いたのはおそらく新潟大だろう。そのあとは全くだれも見なかったという。「僕は回ってくればいいという仕事だったんで、簡単に回ってきました（川田）」。

3走は、東北大・野田選手が崩れることなくトップをキープして帰還。2位で東大・太田選手。差は依然として9分以上。そこから1分も離れず、3位で筑波大・川田選手。東大との差を詰めていた。筑波から5分弱遅れて、4位に千葉大・岡安選手、5位に東工大・世古口選手と続く。さらに6分弱遅れて6位で早大・石沢選手、さらに4分で7位に京都大・田井選手、8位に新潟大・佐藤選手。京都大と新潟大がやや遅れ、アンカーに入賞の望みを託す。

この時点で、「4走出すときに2位は確定だと思った。安良には、“格が違うから一緒にいくな”と言ってあった。安良はその通り清谷を前に行かせた。安良は2人並んだら前に行きたがるタイプなのでせっちゃいけないというのが安良の課題。（筑波大・橋オフィシャル）」。

さて、トップで出た東北大・松沢選手だが、1番ポストへ向かう途中を、ラス前に向かう前走者の筑波大・川田選手に見られている（コースがクロスしている）。「すごい勢いだった。「こりゃあ飛ぶんじゃない？」と思った（川田）」という。松沢選手の述懐。「出るときの心境としては、大差ついてるのわかってるし、予想はできてたが、ずっと競り合いっていうイメージでやってきたんで、そこに落し穴があったかな。インカレ前も競り合いの練習多くて、競り合いに自信つけてたんで。前日の個人戦で山内（早稲田）と併走になったが、これもリレーの練習になるなあと思っていて。かなり競り合いを望んでいたというところはある。競り合いでなくなったとき、気持ちの切り替えができなかった。地図置場で地図取り違えそうになって、その時、「あれ」と思った。ちょっとなんか抜けてたところがあったかもしれない。1番の前後で川田を見た。「筑波とはこれだけ差があるな」。1→2で、前日はかなりコンパス信用してまっすぐ行けたが、コンパス信用せずに自分の力でやったところがあって、それが大きくひびいて泥沼にはまっていった。200mくらい離れた水路にいて、なかなか気付かず、結果的に10分ロスした。ちょっとまずいなと思って、立ち直ろうとしたがずっと乗れなかった」。5→6では東大の清谷選手を見たという。8に向かうときには筑波の安良選手も見てしまう。

スタート前の東北大アンカー・松沢選手。

8番の中間ラジコンは、東大の清谷選手がトップで通過した。会場では、東大OLKの歓声がひびく。続いて筑波・安良選手。「4走の中間が3秒だったんで、安良併走してんじゃないかと心配したが、あの時点で負けることはないと思った。松沢くるんじゃないかという心配はあったけど。（橋）」。安良選手は併走しているわけではなく、たまたま8番の中間ラジコンポストをアタックしたとき、清谷選手と一緒になった。8番を一緒にとったあと、9番が道に乗って、舗装道路からアタックするポスト。安良選手はちゃんと舗装道路を走って、沢を上ってアタックしたが、清谷選手は、手前の藪の中の道を入って勝負をかけたら失敗したという。この話について筑波3走の川田選手、「今年、筑波が勝てた理由は、“普通に帰ってくるんだよ”というのをみんなが守ってくれた。僕が思うに松沢も清谷もリレーがわかってない。普通にいけばいけるのに、変なことするから飛ぶ」。

一方、松沢選手は、「8→9で、この日2番目に大きなロスをして、あとでタイム見ると7分くらいやってるかな？こりゃまずいと。入賞だって逃してしまうんじゃないかという不安になってきて、東工大の4走も見て、見たとき「あれ、どこだろう」と思って、知らないところにも追い付かれたなあと思って（松沢）」

9番ポストを安良選手がトップで通過する。「9ポでふと後ろ見たら松沢がいた。松沢、相当疲れていた。ついてこねーなと思って引き離した（安良）」。「9番とったあと道走りになるが、ここで珍しく足が吊りそうになって、今までで一番吊るという感じに近い状態になって「体力も人並み以下になっちゃったよ」。だんだん情けない気持ちになってきて……。そのあとも3分くらいロス。もう入賞のボーダー前後くらいかと思ってた（松沢）」。

最終ラジコンを安良選手が通過する。続いて千葉大。千葉大の選手はいつの間に上がってきたのか？松沢選手は全く千葉大は見ていないという。ラス前ポストで、松沢選手と清谷選手が同時になった。「清谷にたいして、「負けたか……」というふうに言ったら、「でもまだわからんぞ」と逆に言われて励まされて、そこからがんばって走った。声援が大きかったので、思ったよりいい順位なのかなあと思って……（松沢）」。

筑波大・安良選手は、自分が何位なのかわからないままビジュアルを通過する。「ウイニングランのために、旗もって待ってるのを見た瞬間、優勝がわかった」。筑波大学は実に13年ぶり、リレー制が導入されてからは初の男子団体優勝を遂げた。

6分弱遅れて、2位に千葉大学・佐々木選手。そこから3分弱で3位に東北大学・松沢選手、4位に東京大学・清谷選手。ここ数年優勝を争っていた両校のゴールだった。

「東北大としては、僕が帰ってくるまでに整理できてたと思うんで、応援してくれたし、変に落ち込んでるみたいなんでもなかったんで、いい仲間だなあと思ったけど、逆にそういうふうにしてくれるのが辛いなあっていうのはありました。来年は個人的にはウチは強いだろうと思ってます。北東学連の代表になるのが難しいというのは他学連の人も理解してるでしょうから、代表になってなくても速い人はいますし。今年は楽勝ムード感じてる部員もあって、それはまずいんじゃないかなあっていう部分もあったし……。負けるのを見てることで、来年は本気になってくれるでしょうし。期待してます（松沢）」。

松沢選手、ただ一つ残念だったのは、結局一つも金メダルをとれなかったことだそうだ。昨年も優勝メンバーではない。今年一緒にユニバーに行った4年生のみんな（5人の女の子）が、何がしかの金メダルをとった（金田が個人で。稲村・植田が一昨年、志村が昨年、千葉が今年、それぞれ団体で）。一人乗り遅れてしまったといっている。

来年は、勤務地の近くに優勝をしたいという大学があったらサポートするかもしれないといっていた。東北の監督が入江だろうからということで、入江に対するライバル意識は依然健在。がんばってほしい。

東大の鹿島田オフィシャル『目標は1年間1位ってことでやってたが、リレーのやってる途中で順位を狙うのはナンセンス。向こうの状態で決まるから、レース中に1位を意識するのはナンセンス。そう考えるよりは、自分たちのレースをする中で1位になればいいし……。東北が何分前だからって必要以上に走らない。なるべく一つでも上の順位をとる。東北が崩れたらいつでも上にいきますよという感じはあった。4走の中間で僕らも浮かれたけどああいうことになった。清谷は確かに最後にミスをしたのは確かだが、今の実力からすると60分のレースをすると5分くらいはやる。それが今の実力だから自分はそれで納得しているといっていた。藤咲は、自分がもっとトレーニングして1走で速ければと悔やんでいた。太田と野中は悔しさを表立っては出してなかった。感情で納得する分はいいんだけど、もう少し結果にたいしてシビアに見る目がほしかった』。

東大から6分ほど遅れて、東工大・平山選手と早大・寺井選手がゴールする。最後の道走りでの5位争い。東工大が勝って初入賞となった。早稲田は2年連続の失格に泣いたあとの、うれしい3年ぶりの入賞。

そのあと2分弱で7位に京都大・諏訪選手。さらに1分弱で8位に新潟大・幸山選手。さらに秒差で9位に静岡大・森田選手が続いた。京都大は久々の入賞落ち。新潟・静岡は、目標の入賞を達成できなかった。

筆者はインカレが終わった夜、新潟大と一緒に「西の家」に泊まった。その夜はコンパ。翌朝早く（5時頃）出るときに、1走を走った石黒選手がまだ起きていた。オフィシャルだった元木を待っていたのか。元木に深々と礼を言っている。『入賞したかったです』。その涙が印象的だった。

彼も4年間のインカレを終えた。新しい戦いは、彼等の後輩達の胸の内にもう始まっていることだろう。

筑波大学ウイニングラン。アンカー・安良選手。真後ろ（七夕をもっている）が、1走・小海選手。向かって左手、2走・藤城選手。

男子団体表彰。上段左から、千葉大（須藤・小泉・岡安・佐々木）・筑波大（小海・藤城・川田・安良）・東北大（土井・入江・野田・松沢）
下段左から、東京大（藤咲・野中・太田・清谷）・東京工業大（斎藤・太田・世古口・平山）・早稲田大（羽柴・山内・石沢・寺井）

筑波大学・5人で走った団体戦

4年生の想い・日光の再現・そして佐々木とともに

筑波大学OL愛好会が選ぶベストオリエンティア賞。同票で4年生の佐々木慎一と川田政道が選ばれたそうだ。愛好会を引っぱってきた2人の存在は優勝にも大きく貢献した。愛好会の精神的な支えだったという。

昨年の群馬インカレ。筑波大学男子は入賞をはずし、7位に終わった。当時3年生で走っていたのが、2走の川田、3走の佐々木である。自分のせいで入賞をはずしたと思った川田。悲しみの涙を流した。インカレが終わった次の日、『1年間私のMapを貼らせてください』と言って、みゆきだの地図を部室の掲示板に貼った。『群馬の悔しさを忘れないで』と書いてあったという。去年の雪辱を果たしたい。黙々とトレーニングを重ねる川田の1年が始まった。

9月に、橋先生がオフィシャルに就任する。オフィシャルは学生が選考するが、意見は2分されたそうだ。エリートとの交流が深かった橋先生は下級生には浸透していない。決して橋先生を押す声は大勢を占めなかった。推進派は4年生の小海と川田だったのだという。しかし大勢が変わったのは、最初は推進派でなかった佐々木の言葉だったようだ。『筑波がもし優勝をしたとして、インタビューで壇上に上がる姿をだれが思い浮かぶか』。橋先生でなくて優勝できるのか！大勢は動いた。かくして橋オフィシャルが誕生する。

この時点で橋先生が冷静に判断した戦力は、東北大がトップ。（団体戦合計タイムで）10分後に東大がいて、その5分後に筑波を含め何校かがいる。最初のミーティングで橋先生は2つのことを言った。『目標は3位』『女子と同等までいこう』。女子と同等というのは、女子が2位だったら、男子も2位ということである。橋先生が訴えたのは、どこと対決というよりは、自分たちが向上しようということであったらしい。そしてクラブ作りから始めていった。橋先生が一番気をつけたのもこのクラブづくりだったという。4年生には、下級生の面倒を見ろ、一緒に練習しろとずいぶん言ってきたという。そして最後にこう言っている。『最大の勝因は1年間でクラブがすごくいいクラブになったことだと思う。みんなのベクトルが同じ向きになってきた。それが少し芽生えてきた』。このことは選手のみんなも口をそろえて言っている。

『勝てる雰囲気が今年はあった。みんながインカレに向けてがんばっている。部室に行くと「走ろうぜ！走ろうぜ！」といってくる（藤城）』『スピードトレーニングで去年はエリートだけだったのが、今年は常時20人以上来ていた。エリートの人達がどういうトレーニングしてるかというのを直に下級生に見せられてよかったんではないか。橋先生が主催してくれて、レベルも3段階に分けて。楽しかった（川田）』『いくら上級生がやれって言ってもみんなやらない。自分でがむしゃらにやってればみんなついてくる。俺は佐々木をライバルだと思ってずっとやってきて、4年は4年の中で競ってたし、それを見て周りはよくやってくれたと思うし、逆にみんながトレーニングすごくやってるのを見てやばいと思ってがんばったし。お互いに伸びあっていた（小海）』。

橋先生のコーチングと、会をもりたてていく4年生の存在で、筑波大OL愛好会は、日増しにクラブができ上がっていった。

筑波大学にとって最後の優勝を経験しているのも今の4年生たちだった。日光インカレで見た、加賀屋の3位（男子個人）、小西の優勝（女子個人）、そして女子の団体優勝。『あれがあるから、4年間がんばってきたんじゃないかなあ、と思うところがあって。あの感動を今の下級生に伝えていこうと思った。（小海）』。

3年前の女子は、福士淑子・浜田由紀を擁する千葉大学が大本命。そこを勝つためには、自分たちのベストを尽くし、あとは相手が崩れるのを待つだけ。棚からぼた餅を待つしかない。そのたなぼたを引っかけた、たなぼた作戦を決行した。山から竹を調達して、七夕かざりが会場にお目見えした。今年は男子で、その再現を狙ったのである。4年生が卒業してしまうと、優勝を知っている世代がいなくなる。その危機感は女子の間にも広まっていた。少なくともリレー制が導入されて以降、筑波大女子にそんな世代はない。インカレ前に、山下和子が言っていた。『1年のとき、3連覇してるのを見てる最後の学年だし、筑波ってこんなに強かったんだというのは優勝しないとわからないと思うし、後輩たちに見せてやりたい』。

12月になって、男子団体戦のメンバー候補は、橋先生によって5人に絞られた。佐々木・川田・小海・安良・藤城の5人である。『あとは決めない。調子悪かったやつ、はずすよ』。

年が開けて、橋先生、『東大とは勝負しよう』。既に胸のうちでは東大に勝てると確信している橋先生。潜在的なポテンシャルは筑波の方が上と計算していた（中味は書くのを控えよう）。しかし選手には勝負をしようといって、最後まで3位という目標は変えなかった。橋先生は、3位は標語、だという。『敵をだますには味方をだまさないといけない。味方をだますには、俺自身をだまさないといけない』。

個人戦。藤城が快走。川田はコンタクトが飛んで残念な結果に。佐々木が大きくはずした。そしてその佐々木がメンバーからはずされる。昨年は愛好会の会長だった佐々木。今年もまた愛好会を大いに盛り上げてきた。そうした盛りたて役だったこと、チームリーダーだったこと、……それは愛好会の誰もが一致して認めるところ。佐々木がメンバーからはずされたことには大きなショックがあったに違いない。誰か一人は必ずメンバーからはずれるとわかってはいてもなお。一瞬ムードは落ちた。しかし『それでなおさら4人はがんばろうと思った（安良）』と言う。

レースは1走の小海が出遅れた。小海にとっては魔の9番ポスト。『レース中に悔しくて涙が出そうだった。表彰式で、端のほうで下向いて涙ながしてる姿が浮かんで、upを走った』。ゴールをして2走の藤城にタッチ。藤城はそのまま数秒間、握手をするような形で小海の手を握り締めていた。小海はこの藤城との握手が一番印象に残っているという。『藤城いい奴だなと思った（小海）』。そしてゆっくりと藤城がスタートしていった。

その藤城がゴールレーンを走るとき、偶然にも、一般クラスを走る3走・佐々木慎一が一緒になった。藤城は『佐々木さんの背中が大きく見えた』という。佐々木は、そのすごいめぐりあわせを、『自分も走っている気持ちだった』という（写真）。

3・4走、川田・安良も着実にその役割をこなし、最後のウイニングランを果たした。佐々木もいれて5人で円陣を組む。そして胴上げをされるのもやはり5人の選手。『4年生の皆さんありがとう。5人でメンバー争ったから、引っぱってってもらったし、4年生さまさまでした』と、3年生の藤城選手。

女子は残念ながら優勝を果たせず2位に終わった。しかし後進の育成は着実に進んでいる。表彰式で見せた一般クラス、1・2・3フィニッシュは圧巻であった。男子も加曾利を始めとする2年生の成長が著しい。『今の2年生があるのも川田さんのおかげ。無理やり他大学の練習会にも連れていった。突き上げられて俺たちもがんばったし（藤城）』。

4年生がムードメーカーとなっていた今年の筑波大学。日光インカレの感動は再現された。後輩たちに託された、さらなる躍進。それは感動とともに受け継がれてゆくに違いない。

入賞した筑波大学の選手たち。上段左から、小海・藤城・川田・安良、
下段左から、小山・片岡・田中の各選手。

団体戦女子　津田塾大学初優勝

3強（筑波・広島・静岡）を抑えて大金星

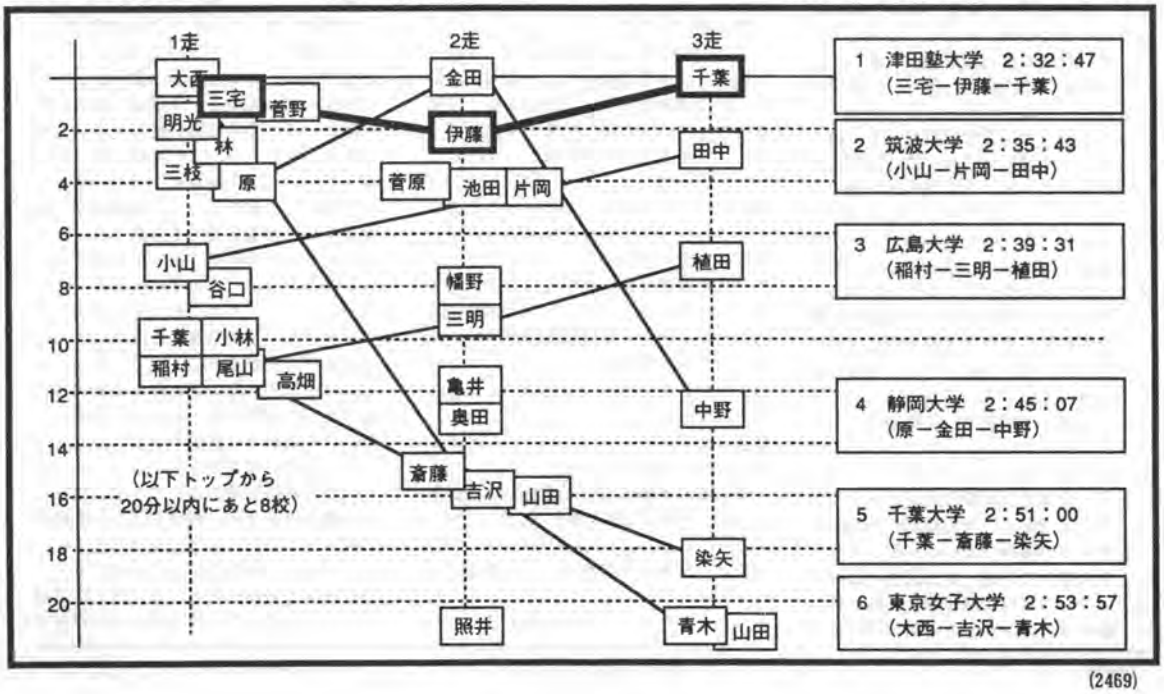
インカレが始まる前、女子の本命はおそらく筑波大学だった。絶大な層の厚さ、そして早大OC大会で見せつけた実力が全国に大きなインパクトを与えていた。早大OC大会に欠席していた静岡大の金田収子に結果を伝えたときのこと、『学生トップが田中（筑波2）、次が片岡（筑波3）』『ええーっ』『千葉あかねがきて、次が小山（筑波3）』『ひろみん（中野）は？志保子は？……』金田の声が悲痛な叫びに聞こえた。金田自身膝を故障してOC大会を欠席している始末だったのである。『筑波はちゃんと調整してきますね。さすがですね。』。三明だけがOC大会に参加していた広島大学。三明から状況を聞いた植田、『うわさによると、筑波がホントに強いと聞いている。』あまり情報の伝わってこない彼女たちには筑波の有力選手の顔すらみんなはわからない。『きてるよきてるよ若いのが』と言った調子。加えて、植田も稲村もまだ卒論の真っ盛りだった。仮に金田がいたとして、優勝した木植のタイムを出したとして上位3人を合計してみる。それでも筑波は静岡より速かった。そんな計算をしてE-mailに流した男がいたようだ。しかしインカレ本番、個人戦の結果は大いに静岡が健闘した。金田収子が優勝し、原志保子が7位で、中野宏美が11位。筑波も、5・6・10位と大健闘だが、合計すると静岡が上回る。広島は稲村9位、三明25位。植田は56位と大きくはずしていた。3強では静岡が一歩リードしたかに見えた。

1走のスタート。中間で飛び出したのは、個人戦4位入賞の津田塾大学三宅選手。三宅によると、『誰もスタートダッシュかけなくてゆっくりだった。スタートフラッグで、美世ちゃん（宮城学院・菅野）がバーンと走ってって、美世、志保子（静岡）、私とあと2〜3人がダーっと。そのあと稲村さん（広島）も前に出てきて、2でポストが違ってばらけた。私と志保子は同じで、先に志保子がとって、3のヤブを越えるルートで志保子がいなくなった。「やっぱり速いな」と思って、先に行ってると思ったので、自分は2番だと思ってた』。最終ポストにいくころには、大西真理子（東京女子）と菅野美世（宮城学院）がずっとくっついていたようだ。最終ポストから大西がパーっと抜け出したという。この大西が1走のトップゴールを果たす。

スタート前、緊張の面持ちの三宅選手（津田塾）。左は、小林るみ子選手（新潟大学）。インカレ前から好調、個人戦も13位と健闘した小林選手は、1走23位。大きく出遅れて涙のインカレとなった（来年がんばれ）。

大西は、インカレ直前の合宿などでリレーの練習をやっても不調。1走は不安だったという。『唱えてたのは、自分のオリエンテーリングをすること、スタートフラッグにつく前にコース全体を見ること。あと、ちゃんとルートプランしてやろう。人が前にいようがいまいが関係なしでやろうとしてました』。昨年一般DUで、地図も見ないで1走を飛び出している姿が、インカレビデオにおさめられている。みんなから、地図ちゃんとみなきゃだめだとさんざん言われて、『そんなに走らないで、地図見ることを第一に考えていきます』と公約したのだそうだ。1番ポストを最後のほうでとったのでみんないなくなった。ちゃんとやらなきゃと、一人でやったという。しかしいつの間にかパックのような状態に。津田塾の三宅選手にも最終ラジコンの前の前ぐらいで追い付いたらしい。ただ、三宅選手はずっと前にいると思っていたので当初、別の選手（同じトリムのお茶大・笠原選手）だと勘違いをしていたようだ。最終ラジコンのあたりで、『ああ、あれミケさん（三宅）なんだ。ミケさんつぼったのかな？でも私もそんなに遅くないんだあ』。

トップで入った東京女子大学は、大西から4年の吉沢由実子へ。大西のタイムは、1〜3走全競技者の中でもトップである。2番目で津田塾大学が三宅から3年の伊藤晶子へ。以下、宮城学院（菅野）、相模女子（明光）、相山女学園（林）、日本女子（三枝）と続き、トップから約3



分遅れて7位静岡大学（原）、更に3分半ほど遅れて8位筑波大学（小山）、更にまた3分半ほど遅れて12位広島大学（稲村）などが続いた。筑波の小山選手は、2→3でミステリアスゾーンをつくったそうだ。その1ヵ所がそのままタイムとなってでてしまったが、「現在地ロストしたわりにはよく戻ってきた。えらいな」と思ったという。山の中では、「ゆきちゃん（片岡）、たまちゃん（田中）ゴメン。貯金つくれなかった」と思ってたらしいが、優勝を逃したといった意識は全然なかった様だ。

1走トップゴールの大西選手（東京女子）。自分がトップゴールだとは全く知らなかった。次走者待機枠を出て、OLKのみんなのところへ戻ってから聞かされる。120%のできだと喜ぶ杉本光正監督（写真）。

さて、2走をトップで出た吉沢選手。『1走帰ってきたときうれしかった。これで絶対入賞できる』。1番ポストまでは誰にもあっていないらしいが、津田塾2走の伊藤選手は既に吉沢選手を視界に入れている。伊藤選手は宮城学院の佐々木選手には一旦追い付かれながら、1番ポストは先にとった。そのあとは最終ラジコンの前のポストまで誰にもあわなかったらしい。トップを走っていたのだからあたりまえだが、本人は知る由もない。東京女子の吉沢選手は、2番でつぼってる間に、相模女子（亀井）、静岡（金田）、北海道（池田）などを見てしまう。3番では筑波の片岡選手も一緒になった。片岡選手は3番へ行く途中に金田選手を見ている。金田選手は2番で大きくロスしているようだ。5番ポストまではたくさん人がいたらしいが、そのあと金田選手が集団から抜け出した。片岡選手はそのとき置いていかれたという。6番のあとには吉沢選手が片岡選手に置いていかれる。そして吉沢選手は、最終ラジコンの8番を通過したあと9番で激しくつぼってしまう。ラスポにつくころには、千葉大まで見て（千葉大は10分後にスタートしている）、すごいショックで泣きそうになったという。

さて、会場では中間伊藤選手トップのアナウンスが流れ、津田塾3走・千葉あかね選手が待機枠にはいる。続いて静岡・金田選手の通過。金田選手は最終ラジコンの一つ手前で伊藤選手に追い付く。最終ラジコンからラス前の間には伊藤選手を引き離したようだ。会場脇のビジュアル区間を金田選手がトップで通過する。待機枠で待つ中野選手（静岡）の緊張が高まる。津田の千葉選手はその逆。『先に収子ちゃんが出たって聞いた時、ちょっとうれしかったかな？』これで千葉選手はリラックスできた。精神的に津田塾は静岡よりも優位に立ったといえる。静岡の金田選手がトップではいる。金田選手、笑顔のゴールだった。2分強遅れて、津田塾・伊藤選手。その2分後くらいに東北大学・菅原路子選手、北海道大学・池田祐子選手が続く。北東学連は大健闘していた。続いて筑波大学・片岡選手。筑波はトップ静岡から遅れること5分弱、津田塾から遅れること2分強で、アンカーにタッチ。2年生の田中裕子選手がスタートを切った。

さて、トップで出た静岡・中野選手だが、彼女の行方はよくわかっていない（取材ができていないため）。千葉選手も田中選手も、彼女の姿はレース中一度も見なかったそうだ。ルート図を見て察するに、中野選手は3番ポストあたりでつぼり、その間に千葉選手・田中選手に追い抜かれたものと思われる。2番手で出た千葉あかね選手は、前半を完璧に守りのレース。『ここで欲を出して優勝しよって思うよりも、2位を守ろうって思って出た。無理に勝とうと思わないようにした。2分差をひっくり返すには危険をともなうレースをしないといけない。それでガーッとなってつぶれるよりは、ハズさないでちゃんとやって、あとは向こうがつぶれるのを待つ』。

会場では中間ラジコン（4番ポスト）を津田塾トップの通過が放送される。続いて筑波。静岡のアナウンスは来ない。金田選手がメガホンを耳にあてて放送に聞き入っているが、しかし放送は無常にも口を閉ざした。

さて山の中では。中間ラジコンを越えた直後（4→5の途中）、千葉選手は後ろに田中選手のトリムを確認する。千葉選手はコンパスを振ってまっすぐ行こうとしていたところを、「筑波かなあ、ホントにDEかなあ。」と思って、それを見極めようと立ち止まってじーっと見ていたそうだ。『よく考えたらすごいバカ』と自分で言っている。そしてよく見たらやっぱり筑波らしいということで、じゃあいかなきゃあって行った。その直進で登っているとき、筑波の3走が田中裕子だということを思い出したそうだ。ここで追い付かれたらゴールで負けてしまう。どうしようどうしようと思っていたら、直進ははずれてしまったらしい（大きく西の方向にずれて行った）。

津田塾の走順について監督の佐藤信彦は当初、千葉を2走に考えていたようだ。それを「どうしても3走やりたい」と言ったのは千葉あかね自身らしい。最後は自分で閉めたいっていうわがままなものもあったというが、「最後が道走りだったら、それで、もしラスポが同時だったら、私はそこから絶対勝つ」って言って走らせてもらったのだという。前日になってオーダー表を見たときに、「しまった！」と思ったそうだ。3走って結構プレッシャーだなあってことを前日になって思ったらしい。田中選手を見て、ラスポが一緒だとしたら勝つのは無理だと思った。「あんなこと言って失敗したなあ」って思ったというからかわいいことだ。

一方田中選手は、千葉選手に見られるよりも先に千葉選手を見ている。4番の中間ラジコンを脱出しているのが見えたらしい。その差を保って追いかけていったら、『あかねさん変な方へ行って、そこで一旦はなれた。そのときたぶん向こうつぼってた』。その通りのようだ。おそらく5番は田中選手が先にとっているのだろう。しかし、はずした千葉選手は個人戦の学習効果が働いていた。個人戦では筑波の中村正子選手に追い付かれたとき動揺してハズして、リロケートできる情報があったのにぐるぐる回って致命的なミスになったという。『あっ、これで3位になっちゃうのか、とあせったが前日のことがあったので「ここであせっちゃいけない」と思って落ち着いてリロケートができた』。クリアリングを見たそうだ。地図には黄色はないが丸い点々はある。作図の経験から「黄色いトーンがはげたんだ」と思ってリロケート。『あー、これで3位になっちゃうのか。あー、やっぱりインカレに弱いとなっちゃうのか、それとも最後に踏ん張って一花咲かせるのか、と思ってがんばった』。

千葉選手のコースは田中選手のコースより1つポストが少ない。5番ポストから最終ラジコンに向かうまでに

田中選手は、5→6→7→8（ﾗｼﾞｺﾝ）

千葉選手は、5→6→7（ﾗｼﾞｺﾝ）

と通過する。おそらく田中選手が6→7に向かっているのと、千葉選手が5→6へ向かっているのは同時進行していたのだろうと思われる。ただ両者はお互いを見ていない。田中選手が7番でつぼっている間に、6番をとった千葉選手が、田中選手の7番脇を通って最終ラジコンに向かった。『7番でつぼってる時に向こうが後ろから出てきてそのままサーっといっちゃって、それでもうそのまま（田中）』『6→7で直進する途中にふっと見たらポストがあって、むこうがパンチしようとしていた。それか、ただそっちに向かってただけかもしれない（千葉）』千葉選手は最終ラジコンをちょっと北にはずれて北からアタック。ラス前へ向かう直進を始めたところで、後ろに田中選手が見える。最終ラジコンを自分と同じように北にはずして出てきている。「あー、私と同じとこに出てる」。『8番（ラス前）をとって、あとは逃げるだけだと思って、ラスポとってからは

がんばって登って、ビジュアルのあたりでいったん後ろ見たけど筑波のトリムが見えなかったので引き離したかなと思って安心して登った』。最後のカーブを曲がったとき、三宅選手と伊藤選手が旗をもって立っているのが見える。一瞬「もしかして」とも思うが、静岡大を見ていないだけに優勝の確信はない。放送も自分の名前は言われているが優勝だとは言っていない。応援のために立っているのか？レーンの外を走るのか？それとも2位でも走れるのか？といろいろ考える。

『私が、あれっ、って気にしてスピード落としたと思うんだけど、後ろ振り向いたらたぶんミケ（三宅）が「そのまま走って」って言った様な気がした。やっぱ優勝かなあと思いつつ、期待して違ってたらがっかりだなあ、いいやあ、とりあえずゴールしよう。と思ってゴールして、わーっとみんなに運ばれて、みんな喜んだりだきあったり。ねえ、ちょっと待ってえって感じで、「ねえねえねえ優勝したの？」って聞いたら、「そうだよ、そうだよ」って言われて、「そうなのかあ。喜んでいいんだあ」と思ったら泣いてしまった』。

津田塾大学が初めて体験するウイニングランだった。

約3分遅れて、2位筑波大学。田中選手のコースは、ラス前が千葉選手よりやや南（下の方向）。その分がタイム差に加わったのだろう。筑波大学は17年連続の入賞である。筑波の4分弱あとを、3位で広島大学・植田選手。今年もアンカーでの素晴しい追い上げを見せた。広島大学は2年連続の3位。そして優勝を含む4年連続の入賞となった。更に5分ほど遅れて、静岡大学・中野選手。足を引きずってのゴールとなった。昨年に引き続きアンカーでの逆転負け。悔しいインカレとなった。静岡大学は6年連続の入賞である。静岡から6分ほど遅れて、千葉大学・染矢選手。千葉大学は3年ぶりのうれしい入賞。伝統校としての復活が期待される。

6位は、東京女子大学（青木選手）と、相模女子大学（山田選手）の激しい入賞争いとなった。最後の道走りで青木選手が山田選手を逆転。劇的な初入賞を遂げた。7位・相模女子大学のあと、8位に京都女子大学が健闘。橘を始めとする他の関西勢が沈むなかで、素晴しいレースを展開した。9位・日本女子大学。10・11位は、東北・北海道の北東学連が占めた。2走までは堂々の入賞圏内。来年以降に期待されよう。

団体戦女子表彰式。上段左から、筑波大学（小山・片岡・田中）・津田塾大学（三宅・伊藤・千葉）・広島大学（稲村・三明・植田）
下段左から、静岡大学（原・金田・中野）・千葉大学（千葉・斎藤・染矢）・東京女子大学（大西・吉沢・青木）

津田塾大学・優勝への道のり
すべてはこの日のために

津田塾大学は過去に2度の入賞経験がある。今年のメンバーも走っているのは2年前の滋賀。今年オフィシャルを勤めた渡辺寿理と、伊藤晶子・千葉あかねがこの順で走って6位。秋頃から伸びてきた2年の千葉と、インターハイchamp伊藤の入部が大きかった。しかしその直後になる翌年度（つまり昨年度）の春、伊藤晶子がにわかにOL界から遠ざかっていった。その微妙な心理状況はだれにもわからない。ただ、同じメンバーでの更なる上位を目指す渡辺・千葉らにとって頭痛の種になっていったのだけは確かだろう。

千葉と同期の三宅朋美が、その夏ヨーロッパに遠征した。帰ってきたら遠くなってきたという。直後の秋合宿で行われた会内杯では、渡辺が三宅に敗れる。渡辺自身が「やばいなっ」って思い出すようになった。この年、インカレのメンバーの決定は直前までもつれこんだ。相当なウダウダ劇があったのだろう。最終的には伊藤が走らず三宅で行くことに。開会式の司会に決まっていた三宅。もちろんこんなことが始めからわかっていれば司会なんて引き受けなかったという。

三宅ー千葉ー渡辺の布陣で構えた群馬インカレ。2月にはこの3人に4年の影山を加えたメンバーで筑波も抑え、関東インカレを制している。しかし三宅は1走で大きく出遅れた。千葉あかねの激しい追い上げもあったが入賞には届かず12位。三宅は走り終わったあとすごいショックで、「もういや、もういや」と言ってわんわん泣いたという。

インカレが終わって、渡辺のもとに三宅から一通の手紙が届いた。1走を失敗した申し訳なさ、オリエンテーリングをやめようとさ

昨年度1走の三宅選手。2走千葉選手へ。

え思ったこと、しかしこのまま食い下がってもいけないという決意表明に加えて、渡辺へのオフィシャルの依頼が書いてあった。『寿理さんにはメダルと一緒に卒業してもらいたかったけど私のせいであーなったので』と三宅は言う。そして三宅の新しい1年が始まっていく。群馬インカレは結果的に三宅を育てていた。

今年度に入っても伊藤晶子は相変わらず。しかし伊藤と走りたいという千葉と三宅の気持ちは変わらなかった。伊藤の持つ潜在的なポテンシャルへの期待は大きい。所詮伊藤なくしては津田塾の入賞もなかった。千葉と三宅に新たな苦悩の日々が始まる。11月。インカレの申込期限が近づく。明確な参加表明のない伊藤。せっぱつまった、朝日大会の終わった夜。渡辺が伊藤に電話を入れた。千葉や三宅からストレートに話すことは避けたのだ。しかし伊藤から明確な意思を引き出すには至らず電話は切れてしまう（長電話を親が怒り出したらしい）。そのあと千葉に「あかねゴメンねー」。翌日津田塾のミーティング。千葉たちが部屋に入ろうとしたら、ちょうど伊藤が出ていった。「あー、いっちゃったー」。しかし部屋に入ったら「あっこさん、インカレ申し込みましたよー」。その夜千葉から渡辺にTEL。「インカレ申し込んだんですよー」「よかったねー」。

津田塾大学は一つのハードルを超えた。しかしまだ伊藤が団体戦を走る気があるのかないのかはわからない。それは千葉や三宅にとっても、メンバーの決まるギリギリまで聞くこと自体がタブーとなっていた。その後、伊藤は関東インカレ（12/25）に顔を出す。千葉や三宅が引っぱっていった様だった。ここまでのことを伊藤に聞いてみた。渡辺との電話については『（何話したか）覚えてない。話しがメチャメチャで寿理さんに迷惑かけた。自分の中でわからない気持ちを人に説明するのが難しくて……』。申し込みについては『お金払い込む時点で、リレーを走るつもりで決心して出したわけではない。それだったらもっと楽だったと思う。関東インカレの時もどうなるのかなあと思いながら…。そこで実績をあげてとか、そこまでは考えてなかったし、誘われたから行ったというのが強かった。あかねさんやミケさんと走る機会もそんなにないし……』

しかし千葉たちにとって、関東インカレを走ってくれる伊藤を目にすることができたのは心強かったに違いない。不安もありながら、きっと伊藤は走ってくれると信じて半分気持ちはすっきりしてたのではないのだろうか。

年が明けて1/8の東工大リレー。三宅が「今年はやりますよ」と気合いが入っている。異様なまでの強気さが目だった。2/12、全日本リレー大会。ゴール直後の三宅がガッツポーズで「やまじゅんに勝った！！」。えらく気合いの入った顔で叫んでいる。同じ岐阜県チームの山口純子（インカレシード）のタイムを上回ったそうだ。金田や千葉も上回る好タイムだった。相当調子がいい。反して、年明けから、合宿・練習会などで富士のテラインをはずし続けていた千葉。富士のテラインが下手になったと、不安気な発言もはく不調さだったが、全日本リレーは東京都のチームで優勝した。『これで自信をつけてくれたら……』と、佐藤信彦監督。

2/19、早大OC大会。津田塾最後のセレクションである。伊藤晶子も来ていた。津田のセレクションは、千葉大・筑波大・早稲田の3大会。伊藤は千葉大を不参加、筑波大では足に豆ができて遅いタイム。『OC大会でタイム出してくれないと、団体戦走ってくれと言えない微妙なところ。でも、あっこ、OCで速かった。すごいいい成績出してくれたから、そこで一気にこの3人しかないという雰囲気になって、レースが終わった直後ミーティング開いて投票した（渡辺）』。3名連記の無記名投票。あけてみると満場一致で＜千葉・三宅・伊藤＞となっていた。それはつまり、伊藤が伊藤自身を投票したということ。千葉あかねの目が潤む。『最近はやる気になってきた、みたいなことを言って、「選んでもらってうれしい」って言って、あっこも、うるうるしちゃって「、あー、長かったなあ……」と思って私もうるうるしちゃって（千葉）』千葉と三宅は感動に包まれる。

伊藤自身は、『いざ投票になっても迷っていた。エリートとして走ることは、津田のみんなで走るということと思ったこともあって、あー責任重いわ、と思って、もし選ばれたら、“あんたは他にやりたいことがあってもこっちに時間かけないといけないんだぞ”と自分にいいきかせながら書いた』という。しかしインカレ前（2/28）、彼女は語っていた。『入学以来お世話になってた大好きな先輩いなくなるっていうこともあって、……学生のうちにあの2人と走れるのは最後だしというのが大きかった』。あとの2人が自分と一緒に走りたがってることは、周りの人から聞いてわかっていたという。ただいずれにせよ、自分の気持ちは自分で決めたいというのはあったようだ。『そのほうが2人もいいんじゃないかと思って…』。

投票のあとみんなで一言づつ。1年生の青木香澄、『あかねさんと三宅さんの優勝するところをみたいです』。千葉はジーンときている。伊藤のこと、1年生の言葉、……千葉の目はOC大会の会場で最後まで潤みっぱなしだった。同じく1年生の松井心が、インカレが楽しみでしょうがないという。『まだ経験していないのに、楽しみにしてくれてるのを聞いて、それがすごくうれしかった（三宅）』

津田の結束は固かった。

メンバーがさっさと決まり、直前合宿も調整に専念できる。昨年はこの合宿までメンバーの決定がずれ込んでいた。『雰囲気はいいんじゃないでしょうか。去年に比べるとずっと。（2/21・三宅）』。このころ三宅自身は入賞を目標に。どこが入賞してもおかしくないなかで入賞を狙うには上を見ないといけない。筑波を視野にいれていた。『筑波は抜けてる気がしないでもないなあ。OC大会の結果とか見てもこわいですよ。敗えていえば向こうはメンツ若いから、経験だけは勝ってると思うしかない。（2/21・三宅）』。実はこのころまだ筑波のメンバーは決まっていなかったが、三宅は＜小山・片岡・田中＞と読んでいた。小山と片岡に付け入る隙を感じていたようだ。千葉もそれより以前に、『広島と静岡は普通にやってれば勝てないが、学連リレーの筑波を見て、まだまだあなどれる。かってにつぶれれば勝てる可能性がある。（1/18・千葉）』と語っている。学連リレー（12月の関東インカレのこと）といえば自分こそハデに飛んで、どんなにあなどられても仕方のないタイムだったのを完全に棚に上げているが、いずれにしても筑波はいいターゲットに捕えられていたようである。

直前合宿の調整はうまくいったようだ。

『みてて強そう。筑波にひけをとらないと思っています。ミケさん（三宅）が去年なんかより一回りも二回りも大きくなってて、いとあきさん（伊藤）も切れ味が鋭くて、3人のどれをとっても抜けめがないのですごいなあと思っている（2/26・東京女子・大西真理子）』。津田は、心身ともに充実していた。

直前に三宅から聞いた千葉あかねの発言集。『あの3校にかなわないにしても、優勝に絡んで盛り上げたい』たとえ最後は駄目だったとしても、途中で『おー！！津田！！』とかビビらせるそうだ。『3校が3校ともベストのレースなんかしないから、どっか1校は崩れるだろう』

オフィシャルの渡辺との会話（3/1）。『去年初めて旗を作ったんですけど、でもポールがなかったんですよー。今年はポールを買うんですよー』『それがどうしたんだ』『ウイニングランに使うんですよー。キャー。』

迎えた静岡インカレ。個人戦。三宅が入賞して、シードの千葉は飛んだ。表彰式を控えて舞台横に控えている入賞選手。三宅の顔がさえない。『もっとうれしそうな顔しろよ』『…なんか疲れちゃって……だって，あかねが……。あかねのバカ。……』

インカレの後、『あかねにすごい優勝してもらいたかったから、素直に喜べない部分あって、もやもやしてた。でも，あかねも早く気持ち切り替えて明日のこと考えてるようだった』

千葉は、『表彰式のときの辛さは、なかったと言えばうそになるけど…。ゆみお（東京女子・吉沢由実子）と一緒に花をやろうとキャーキャーやってたら，それで紛れてよかった。宿でもばか話ししてて、なんか…津田の雰囲気すごく良くて，我ながら何でこんなに明るいのかなあ……って』

千葉あかねは、結局インカレ個人のメダルをとれなかった。今年のショートインカレが終わったとき（ショートもはずして決勝進出すらできなかったし、その前月のユニバーでもクラシカルではずしてリレーのメンバーにもなれなかった）、こんなに悔しい思いを続けているから、最後は神様がご褒美をくれるに違いないと信じようとしている彼女。しかし今年最後の個人戦にもご褒美はなかった。個人戦最後の道走りで、『あー、なんでこうなっちゃうんだろう。今年もメダルだめだったなあ』。体が前に進まない。ここで走らないと後悔するという思いと、走る気力が起きなくなるのとがごちゃまぜになる。もうイヤダーッって投げたくなる気分を無理やり走らせていた。ゴール後倒れこんでしばらく寝ていた。しかし立ち直りは比較的早かったようだ。「ミケ入賞して明日はいけるぞー」。去年は同期のシードがみんな入賞して自分だけが取り残された。今年は稲村も植田もはずしている。「悔しいのは私だけじゃないんだあ……」。植田佳子が『「100分かかちゃったあー」って、あんまり元気なさげで、「明日がんばろうねー」ってお互い言って、ちょっと同志を見つけた様なそんな気持ちになっちゃって』。4年生ががんばってるのもうれしかったという。金田収子にもおめでとうを言いにいった。

団体戦。1走中間を三宅がトップ。最後は2位で伊藤晶子へ。伊藤も中間をトップ。大健闘だった。本来ならプレッシャーのかかる3走の千葉。しかし静岡の金田収子にも抜かれずがんばっている伊藤に感極まっていた。三宅も伊藤もすごくがんばってることに嬉しくて涙がでてくる。泣きそうな状態を一生懸命こらえていたら緊張しているようにとられたそうだ。

津田の勝利は、彼女たちの心の内に既にあったのかもしれない。

東大OLKの歓喜の中を3人が走る。初めてのウイニングラン。そして、千葉あかね、インカレ初の金メダル。最後の最後に与えられた神様のご褒美だった。伊藤のことも、去年の三宅の悔しさも、千葉の悔しさも昨日のことも、……すべてはこの日のために、この瞬間のために用意されていた。千葉あかねは、そう思う。

さて最後に、個人とも入賞を果たした立役者、三宅朋美への賞賛を、渡辺オフィシャルの言葉を借りて書いておこう。『レースアナリシスとか毎回書いてたみたいで、インカレの時初めて知った。すごい努力家で、周りのエリートにルート見てもらったりしてたみたいで、その貪欲さがすごい。1年間、今回のインカレのために努力してきた。去年をバネにしたって言ってた。でも努力すれば、ここまで速くなったという教科書みたいな成績を出してくれた。下級生に対して勇気づけてくれるような気がして。その貢献は大きい』

千葉と三宅のインカレは終わった。下級生に与えた感動は、きっといつか下級生が返してくれるだろう。その日のために津田塾大学は今、一つの輝きを歴史に刻んだ。

団体戦ウイニングランの直後。左から、佐藤信彦・伊藤晶子・千葉あかね・三宅朋美・渡辺寿理。

東京女子大学・悲願の初入賞

あの感動を私たちが

東京女子大学のインカレにおける歴史は決して新しいものではない。リレー制の始まった第7回大会からすでにチームを組んでおり、過去にもそこそこの成績を残してきている（10回大会11位・12回大会8位・13回大会7位・15回大会11位）。今の杉本光正監督が東京女子の面倒を見始めたのは6年前。吉原奈穂子（現・佐藤信彦夫人）らが活躍していた時代である。

東京女子が過去最高順位をとったのは13回大会（岐阜）の7位。26秒差で入賞をのがした。そのとき2年生選手だった阿部真弓がそれからの3年間を走ることになる。岐阜インカレの7位は伝説のように語り継がれてはきたが、今の4年生には知らない時代のこと。むしろ4年生に影響を与えていたのは、その阿部たちが4年生だった第15回大会（滋賀）のことである。今の4年生が2年生のときだった。

3人の4年生が走った。アンカーの阿部は中間を6位。しかし地図を落としたらしい。『すごい泣きながら帰ってきたんですけど、ゴールしたあと「悔いはありません」って泣きながら言うんですよ。それ聞いて、先輩っていうもののすごさを感じた（青木）』。今年走った青木も吉沢も、そのときの感動を忘れてはいない。吉沢が青木に出した年賀状には『一昨年12期からもらった感動を今度は私たちが伝えましょう！！』と書いてあったそうだ。彼女たちもすでに4年生となっていた。

6月、エース青木が東大大会の前日試走で、左内側の膝のじん帯を切った。ギブスで1ヵ月間固定。トイレや入浴すらままならない生活の中で、就職活動も行った。涙ぐましい努力があったようだ。

ある会社の面接で、相模女子大の山田里香と偶然一緒になったらしい。顔は見たことがあったが知り合ったのはその日。面接では青木が先にオリエンテーリングのことを聞かれて全部しゃべってしまう。かわいそうに山田は別の話題になったという。山田も後に足を痛めることになる。しかしまさか2人がインカレで、入賞をかけての激しいデッドヒートを演じることになろうとは、本人達も予想だにしなかったに違いない。

青木は、ギブスがとれても歩けるようになるには1ヵ月のリハビリが必要だった。ようやくオリエンテーリングを再開したのは9月の終わり。まともにAクラスに出たのは11月末の朝日大会からだった。12月の関東セレクションではレース中に足が吊って10分くらい動けなかったという。もちろんセレクションには落ちた。

さて、東京女子大の代表メンバーを決める会内のセレクション。当初のレースでは、乗松裕子（3年）や佐藤由布子（4年）が上位にいた。2人とも昨年の団体戦を走ったメンバーである。しかし最後は、他の選手に追い上げられ抜かされた。ポイントの最高位は吉沢由実子。3年のときは比較的やる気のなかったという彼女だが、4年生となった今年はオリエンをやりまくった。最終セレクションとなった早大OC大会では、D21Aで、津田の三宅や伊藤も破り、優勝を遂げている。青木も年末頃から本格的に復活。関東インカレ（リレー）でも快走を見せた。3番目は、SQUAD Jr.強化選手の、新星・大西真理子。早大OC大会でようやくポイントをあげ、ギリギリでメンバーに滑り込んだ。

吉沢選手（右）。団体戦当日の朝。津田塾大・三宅選手（左）と。

セレクションに落ちた乗松はインカレの1週間前にこう言っている。『とりあえず、私が去年走って、それが自分の自己満足に終わったのが悲しかった。今年は東女のみんなの気持ちとして走りたかった。本セレ落ちたのも、個人戦への思いがないからこけたんだと考えていた。団体落ちたのは、どんでんがえしだったので、メンバーの人達には入賞してもらって、私はこの人達に負けてたのね…と思いたいし、4年生にはすごいお世話になったし、最後にかっこいいとこ見せてほしいな。併設できるだけさっさと帰ってきて、みんなのサポートしたいな。』

インカレの直前合宿では吉沢も青木も調子がよかったようだ。『4年生がちがいます』津田の4年生も含めて、大西がインカレ前に言っていた。

そして本番。その2人の4年生をバックに大西が1走、トップゴール。2走の吉沢は少々崩れたが、エース青木が期待を背負ってスタートする。山の中ではあまり人を見なかったそうだが、相模女の山田選手にはところどころであった。最終ラジコンも一緒に。そして併走。ラスポをとって最後の道走り。ビジュアル区間にはいる。『OLKの人がすごい顔で声援してて、抜かせばなんとか…と言ってて、岐阜の秒差で7位というのをずっと聞かされてたから、もしそんなことがあったら一生後悔すると思って、それに3走の役割というのは目の前にいる人を必ず抜かしてこなければいけないということをやっと思い出して、坂で山田さん歩き始めて、「あー抜かせる」と思って抜かして、あとは下りだったんで必死で走った。抜かしたとき、言えなかったけど「山田さんがんばれ」という気持ちだった（青木）』。会場ではグランドに戻ってくる選手の姿を覗き込むように待つ吉沢選手。先に入ったほうが入賞である。そして先に姿の見えたのは青木選手だった。飛び跳ねて喜ぶ吉沢選手。東大OLKの大歓声の中を青木選手がゴールする。ゴールレーンの内側を杉本監督も走る。そしてゴール。『6位！！』両手を上げて杉本監督が叫ぶ。その胸の中にそのまま飛び込む青木選手。故障した足との闘い。そして最後はその足でつかんだ入賞のインカレメダルだった。

『あのとき、応援がなかったら抜かしてなかった（青木）』。応援をした下級生の胸に、新たな感動が伝達されていく。4年生が見せた最高の輝きだった。

アンカー・青木選手、入賞のゴール

大会運営学 －大会を開き、育てる法－

第7回 コンセプトとアイデンティティ

早大ＯＣ寿会　池ケ谷悦朗

大会全体を包み込むもの

私が提供できる話題も残すところあと僅かとなった。この連載の最後に取り上げるのは大会全体を包み込む「コンセプト」と、時をこえて流れる「その大会らしさ」、すなわち「大会のアイデンティティ」に関してである。

前回、アイデアが劇的な効果をもたらすと述べた。しかし、実を言うと、アイデアだけでは、それは難しい。アイデアは言わば局地的な戦術に過ぎない。真に重要なのは戦術ではなく、全体的な戦略である。さらに言えば、どんな大会にしたいのかというコンセプトであり、ビジョンである。アイデアは、そのコンセプトを具体化するものとして、それに沿って集約的に実現されて、初めて効果がある。コンセプトに沿わないアイデアをいくら実現させても、奇抜なものの寄せ集めができあがるに過ぎない。そのような大会に全体像を見い出すことは、決してできないのである。

大会運営の３類型

私は大学４年の冬、早大ＯＣの会報誌上で大会運営の以下の３類型への分類を試みた。

(1)ただの大会開催
(2)戦術的大会運営
(3)戦略的大会運営

以下、それぞれの概略を示そう。

(1) ただの大会開催

ただの大会開催とは、何も考えず、ただ開けば良いということで開かれる大会である。本来、このようなことは考えられないが、大会を開き始めた頃のスピリットが風化してしまった場合や、年中行事としてこなさなければならない場合などに見られる。日程消化的大会運営と言っても良いかも知れない。

(2) 戦術的大会運営

戦術的大会運営とは、各所で「良い大会」を目指して努力しているものの、目指す「良い大会」の姿そのものが不明確で、それぞれの努力が意図的な関連性なく行われている大会である。

(3) 戦略的大会運営

戦略的大会運営とは、目指している大会の姿が内外に明確になっており、そこに向かって、あらゆる面で努力している大会である。

イレギュラーイベントに見る戦略的運営

さて、言うまでもなく、大会運営は(3)の戦略的大会運営でなければならない、と私は考えている。そこで、このタイプの典型として、昭和５５年のお正月にグリズリーが主催した『イレギュラーイベント』という大会を紹介しておこう。グリズリーは、昭和５２年から５５年にかけて活躍した、当時の著名な学生エリート・オリエンティアから成る大会運営集団的なグループである。

この『イレギュラーイベント』は、その名の通り、何から何までイレギュラーなイベントであった。大体、どんな行事であるかが知らされない。スタート地点は地図の余白で、テレインまでは地図なしで行かなければならない。ポスト位置は「等高線と磁北線の交点」と来た。つまり、特徴物のない、ただの林の中だったりする。もちろん、いずれも位置は正確である。一つのコブに１３個もポストはついているし、迷路のような墓場の中にも設置されている。最終ポストの位置説明は「花の香り」で、何かと思えば『ピコレット』が置いてあって香りが漂うようにしてある。表彰式では、トップゴールやタイムが１時間ちょうどの人にはそれぞれ洗剤の『トップ』や『ジャスト』が授与される、という具合に何から何までイレギュラーなイベントだった。

いかがであろうか。「イレギュラー」という明確なコンセプトが、大会のすみずみにまで浸透していることがおわかりいただけただろう。確かに、特殊なイベントではあるが、この大会は戦略的な大会運営という意味で、一つの理想型である。

ところで、賞品として『トップ』や『ジャスト』を授与するのは、他の大会でもできる。しかし、これはこの大会の「イレギュラー」というコンセプトの下でこそ活きてくるものではないだろうか。もし普通の大会で同じことをしたら、そこだけが浮いてしまうに違いない。アイデアは、基本的なコンセプトに沿って集中的に実現させてこそ、大きな効果があるのである。

目指す姿を言葉にする

残念ながら、今日の大会の多くは戦略的大会運営とは程遠い。たとえば、大会要綱一つをとって見ても「どんな大会を目指しているか」が伝わってくることは少ない。「どんな大会にするか？」という本来最初に議論すべき基本的なことがらについて、ほとんど合っていないのではないだろうか。

先ほど紹介した小文の中で、私は早大ＯＣ大会が早大ＯＣ大会らしくあるゆえんとして、次の２つを掲げた。

一つは、「*Orienteer Oriented* ― 喜ばれる大会をつくりたい ―」というコピーにして掲げた、参加者指向の姿勢である。

もう一つは、「先駆の伝統 ― いつの時も先駆者であること ―」として示した、果敢にチャレンジする姿勢である。

内容はさておき、この主張をして良かったと、私は思っている。なぜならば、この後、早大ＯＣでは「ワセダらしさ」についての議論が、非常に活発になったからである。会報には、例年よりずっと早くから、ＯＣ大会に

関する記事が掲載された。ある時は、第9回大会（『天狗岩』）の準備を進めているチーフたちが座談会を行って、自分たちの考えを披露し、また、ある時は、第8回大会（『深良財産区』）を成功させた4年生が主張した。「OC大会らしさ」は、こうした喜々として取り組む上級生の姿や真剣な議論を通じて、クラブに根づいていったのである。

私が思うに、「こういう大会にしよう。」と思ったら、それをストレートに宣言してしまった方が良い。その方が内外に浸透する。共感が得られる。

「『地図、競技の京葉』の名の下に運営される、競技性本位の大会」（前回大会の要綱より）――これは、京葉OLクラブが目指す[illegible]の姿である。こう宣言することで、参加者の期待も、運営者の努力も、ここに集中する。そして、共鳴して、大会は成功する。

うわっつらだけのキャッチコピーではない。自分たちの目指す姿をいま一度見つめ直し、そして、それを言葉にしてから、準備に取り掛かろう。今日の大会運営からは、このフェーズが欠落している。作業をすることで運営した気になっている。それではいけない。初心に帰って、自分たちの大会のあり方を考え直してみようではないか。

織りなされる大会の色

私が投稿をした翌月の会報では、一つ上の先輩である細川忠政氏（練馬OLC）が、大会のアイデンティティを織物にたとえて述べ、[illegible]稿を補足してくれた。それを私流にまとめると以下のようになる。

「OC大会は単なる積み重ねではなく、織りなされるものである。次の横糸については、それまでと同じものを同じように織り込む、保守的な選択をする必要はない。すでに織り上がった部分のコンテクスト（文脈）を読み取り、それとの調和を考えた上で新しい横糸を考えれば良いのだ。」―まさに至言である。

私の投稿から既に9年がたつ。それだけに一層、スピリットの風化や、ただこなすだけの大会開催が現実味を帯びてきている。

第13回早大OC大会（これも4年前になるが）の成績表で、実行委員長の清水健二氏は以下のように述べている。

「OC大会が数あるOL大会の中でも、常に独創的・先進的な方向性をもって進んできたのは自他ともに認めるところと思います。しかし、我々を取り巻く状況は決して楽なものではありません。来年早大OCは創部15年を迎えます。学生OL界・日本OL界の創造、発展に情熱を捧げた先哲達の息吹が薄らぎつつあるのは否めない事実です。毎年、OL・OL界を知らない新入生が入部し、しかも、執行学年が変わっていく中で、あまりに重いOCの伝統を受け継いでいくのは、それだけで精一杯の感もあります。しかし、OCの伝統とは、伝統それ自身を超えていこうという進取の精神です。伝統を受け継ぐというのは、新たな伝統を創りだすことにほかなりません。」

開くだけでも大変であることを認めながらも、果敢にチャレンジする姿勢が伝わってくる。最後の部分はまさに圧巻である。私は、折にふれて、この文章を更に下の後輩たちに紹介している。そして、ここに書かれたことは、他のクラブにも通じるものがあるのではなかろうか。

私は、この連載を、学生クラブの皆さんにエールをおくるつもりで書いてきた。もちろん、地域クラブにもがんばってもらいたい。地域クラブも学生クラブも、それぞれが自分のカラーをぶつけあって欲しい。大会運営の面でも、もっと競い合い、切磋琢磨しながら互いに成長していって欲しいと願う。

今回紹介した、私が大学4年の冬に書いた小文 ― 実は、そのタイトルが『大会運営学』であった。その投稿にどれほどの効果があったかはわからない。しかし、とにかく、OC大会は後輩たちによって大きく育てられた。今回、この連載に再び同じ名を冠したのは、それにあやかってのことでもあったのである。

あとがき

私が、私自身の経験に基づいてお話できるのは以上である。大会運営の総合的なテキストを期待していた方にとっては物足りないかも知れないが、背伸びをせず、ここで終わりにしておきたい。

これから初めて大会を開こうとしている読者の中には、先行するクラブのシステマチックな運営に驚いた方もあろう。しかし、心配は無用である。ヤル気においては、あなたの方が、まさっているに違いない。私は、よくクルマのギアにたとえて言うのだが、彼らはトップギアで巡航するクルマのようなものだ。過去の蓄積の上に立っているから比較的簡単に大きな大会を開けるのであって、ゼロから発進できるだけの力を持っているかどうか。ちょっとしたことでノッキングしはしないか。

他方、伝統あるクラブの皆さんに対しては、自分が恵まれた環境にいることを理解して、それに甘えることなく、また、ノウハウを無駄にすることなく、さらなる飛躍を目指していってもらいたい。

昭和53年5月10日の日本経済新聞の最終頁「文化」に、第4回全日本大会（常陸大子）HE優勝の杉山隆司氏の「本場仕込み　オリエンテーリング」という文章が、大きく掲載されている。氏は1975年の全英選手権者でもある。その中で、氏はこう書いている。

「オリエンテーリングの楽しみは、競技に出場したり、地図を集めたりすることだけにあるのではない。大会の運営そのものに携わることこそ真にオリエンテーリングを知り、その醍醐味を理解することになろう。」と。

本連載に当たっては、多くの方にお世話になった。貴重な地図調査の記録を提供して下さった京葉OLCの田中徹氏、生産性の経験則を教えて下さった山岸倫也氏、村越真氏、山川克則氏。最新の情報を提供して下さった早川正美氏、尾上秀雄氏、岩出雅人氏。資料を提供してくれた天野仁氏、筑波大まで出掛けて調べものをしてくれた篠崎東雄氏。連載第5回の原稿の校閲をして下さった筆谷敏正氏。また、桐田幸宏氏にもお世話になった。それから、第15回早大OC大会の詳細な報告書を書いてくれたチーフの方々 ――。この場を借りて、感謝の意を表したい。

そして、編集部の田口氏ご夫妻には本当にお世話になった。

ここに記して、御礼申し上げたい。

本連載に対するご意見をお待ちしています。
PC-VAN　　:TVE85241
Niftyserve:GGF01303
E-mail　　:ikegaya@pfu.fujitsu.co.jp

オリエンティアのための Medical Advice

OLCレオ 愛場　庸雅

⑦ 故障について =その２=

故障の原因

では故障の原因はどこにあるのでしょうか。これにはいろいろありますので，順番に説明していきましょう。

(1) トレーニング法の誤り，使い過ぎ

まず第一に，最も多く，重要なのは，OVERUSE すなわち使い過ぎ，トレーニングのし過ぎです。これには個人の身体状況を考えない画一的トレーニング，同一局所への負荷が反復される単調なトレーニング，過大な負荷がかかる誤ったトレーニング，急激な負荷の増大などの要因があります。ただ問題は，どの位が適切なトレーニング量かを判断するのが難しい点です。強くなりたいために一生懸命トレーニングする人が多いのですが，故障するまでトレーニングの適量がわからないのが実情です。ランニング障害の多くは，トレーニング法に問題があり，回数が多い（距離が長い）ほど，頻度が多いほど，またスピードが増すほど障害の起こる危険性は増すわけですが，そのうち半分は走行距離の問題といわれており，一日 10km 以上，週 60 ～80km以上走る人に多くなるといわれています。障害予防のための健康ランニングとしては一日 15km 以内，一時間半以内，1km あたりのスピード６分以上が望ましいとされています。

(2) 靴と路面

靴の種類にも気をつけなければなりません。最近のスポーツ用の靴は性能が向上しており，信頼できるメーカーのジョギング用シューズならばおおむね間違いないと思いますが，ディスカウントショップで売っている形だけの粗悪品は避ける方が賢明でしょう。ただジョギング用シューズと言ってもいろいろ種類があり，自分の能力に応じて選ぶべきです。大きく分けて，①ジョガー，ＬＳＤ用 ②シリアスランナーのトレーニング用 ③レース用　となるようで，順に底が薄く，軽くなっていきますが，故障の予防の点からは，安定性の良い①が最も良いでしょう。靴の選び方はランニング専門誌などに書いてありますが，ポイントとしては，

1. 底は厚い方がよい。ただしクッションが良過ぎてグラグラするのはかえってアキレス腱炎などを起こしやすい。
2. かかとがしっかり支えられており，また適当なアーチサポート（土踏まずの部分のサポート）がある。
3. 足のサイズが適切なこと。特に最近は幅のサイズも重視されてきつつある。

などが挙げられます。

次に走る路面ですが，普段のトレーニングはどうしてもアスファルトの上が多くなると思いますが，足にかかる負担を減らすためには，土や芝生の上が最適です。但し不整地の場合こんどは捻挫，肉ばなれを起こさないように注意しなければなりません。またトラックなどを走る場合，同一方向回りばかりを続けていると，左右のバランスが崩れる元になるので，回る方向も時には変えたほうがいいようです。アップダウンのあるコースは，筋力や心肺能力を鍛えるにはいいのですが，アップヒルでは下腿三頭筋やアキレス腱に負担がかかり易く，ダウンヒルでは膝を中心とした障害が起こり易いといわれています。急斜面でのスピードトレーニングは考えもののようです。

(3) 故障の季節，天気

ランニング障害は，10月から２月にかけて，著しく多くなっています。これは寒さが厳しいことのほかに，多くのレースが行なわれるシーズンで，練習量が多くなることも一因です。寒いと筋肉や腱の伸展性は低下し，ランニングのショックを吸収しにくいので，関節，骨に負担がかかり易いし，筋，腱，筋膜なども痛みやすくなっています。従って冬場は暖かい日に，暖かい時間帯に走るべきであると言われています。冬の寒い日や，早朝，夕刻，夜などの時間帯は十分なウォームアップ，ストレッチングが重要です。また防寒対策を十分にし，ジャージの上からウインドブレーカーを着用して，走り始めて暖かくなったら脱いでいくなどの対策が必要です。春から夏にかけては故障が発生しにくいので，一般の fun run にはこの時期が良いと言われています。

(4) 準備運動，柔軟性

準備運動の不足，すなわち筋，腱が十分にほぐれていない状態での激しい動きは，大きな事故や故障の元になります。激しいトレーニングをするときは，必ず全身の筋肉が一通り暖まって，十分に動けるようになっている必要があります。さらに終わったあとのダウンも注意して十分に行なって頂きたいと思います。疲労をため込まないで，早く回復させるためにも，ダウンを重視してください。さらにその前段階として，体が柔軟であることが大切です。体が柔軟であるということは，筋，腱が十分に伸展することができるということです。筋肉は，収縮することによりその力を発揮するわけですが，十分伸展できないとその力を発揮することができません。従って，体の柔軟性は筋力を保ち，故障を予防するのに非常に重要です。体が硬いのは極めて不利なことで，体が硬い人は筋力トレーニングよりもストレッチングなどで柔軟性を身につけるほうが先決でしょう，それと共に，食事との関連性も柔軟性と関係が深いと言われています。

(5) 体のバランスの乱れ

故障の根本的な原因の多くは体のひずみ，筋力のアンバランスからくると言われています。人の体は全く対称であるこ

とはなく，左右，上下，前後で多少のアンバランスがあるのは普通ですが，故障を起こしている時はこれが著しくなっています。これは，長い間の強い負荷によって増幅され，一方の筋肉や関節のみに負担がかかって故障につながるのです。だからこのバランスの乱れがないかどうか，筋力や柔軟性に差がないかを時々チェックしておく方がよいでしょう。しかし一方が痛いから，その側が弱いと単純には言えません。この点は整体師などのプロに診てもらったほうが良いでしょう。特に背骨のゆがみはいろいろな影響が出ると言われています。もっとも人の体は利き手，利き足があり，手足の長さも皆左右で違います。背骨がまっすぐなはずはありません。しかしこれが極端になると故障を起こし易いのは確かなようです。そしてこれは個人的な差が多く，その人の先天的な体型，既往歴，手術歴，癖など様々な要因によって変わってきます。

(6) 冷え，不節制

東洋医学的な面から，足，膝，腰などの故障について言えることは，腎系統や，肝系統の障害が原因にあることが多いと言われています。ここで言う腎，肝は西洋医学で言う腎臓，肝臓以外に，腎系統では骨，膀胱，生殖器，耳，脳，髪などが，肝系統では筋肉，腱，胆嚢，目などが関係する臓器です。

腎系統の障害から起こる故障は，体の冷えや水分のとり過ぎが原因と言われています。必要もないのに過剰な水分をとり過ぎたり，熱帯産の果物や夏野菜，砂糖など体を冷やすものをとり過ぎていると，故障を起こし易いようです。ビールやコーヒーなどは故障を抱えた人は禁物です。水分が過剰になると，体の裏側（ランナーが故障を起こし易い所であることに注意）に余分な水分がたまって悪さをするのです。特に手首，足首や膝の後ろ側の故障は，この腎系統の障害と関連が深いようです。

また肝系統は筋肉と関係が深いので，肝臓に負担をかける，アルコール，砂糖，タンパク質や脂肪のとり過ぎ，一切の薬物は，筋肉に対しても悪い影響を与えます。もちろんどんなものでも食べ過ぎていると，肝臓での処理が追い付かず肝臓に負担をかけてひいては筋肉，腱の故障を呼ぶわけです。また肝臓は怒りの感情とも密接な関連があるといわれ，怒ってばかりいる人は，肝臓の故障を起こし易いと言われています。

それ以外に，胃腸に負担をかけ過ぎていると，これも故障の元になります。食べ過ぎ，よく噛まないで食べる，といったことは，食物の消化に大きな影響があるといわれる胃系統や脾系統（西洋医学では膵臓に近い）に負担をかけ，これも故障のもとになるようです。特に，肘や膝の故障とは関連が深いといわれています。この腎，膀胱，肝，胆，胃，脾の6系統の経絡は全て足を走っており，足腰の障害がこれらの内臓機能とも関連があることを示すとともに，逆にこれらの故障に効くツボも足にあります。なかなか面白いものですね。

故障で悩んでいる人は一度しっかりと自分の食生活をはじめ生活全般を見直してみてはどうでしょうか。

＝情報あれこれ＝

長野県ＯＬ協会 平成７年度 合宿情報

日本学生ＯＬ選手権大会，全日本ＯＬ選手権大会が終了し，オリエンティアの皆さんはそろそろ夏のＯＬの計画を立てる頃ではないでしょうか。

長野県ＯＬ協会では，今年の夏も信州でＯＬを楽しんでいただきたいと考えております。以下に長野県の合宿情報を載せますのでご利用ください。なお，詳しい情報に関しては，早大ＯＣ発行の「ＯＬテレイン情報 1994 」を参考にして頂くか長野県ＯＬ協会まで直接お問い合わせください。

①「信州晴ヶ峰高原」(1:15000) ・「国立信州高遠少年自然の家」(1:10000)

近年，多くのオリエンティアに利用されるようになってきた「国立信州高遠少年自然の家」も，一昨年に長野県ＯＬ協会と R.M.O- ｻｰﾋﾞｽによって本格的 O-MAP「信州晴ヶ峰高原」が開設されてから更に使い易くなりました。最大 450名収容の施設は早い時期からの予約が必要。自動車でないと行けないのがネックですが，真夏の 1200mの高原は快適ですよ。

②「駒ヶ根高原」・「千人塚」・「山吹高原」（いずれも 1:15000）

夏合宿に人気のある「駒ヶ根高原」・「千人塚」は今年も健在です。中央アルプス・フラワーロードが全通して両テレインの移動時間は車で約20分。旅館・民宿などの他にログハウスなど宿泊施設も充実しています。両テレインでは本年度第16回長野県ＯＬ２日間大会を計画中。合宿と併せてご参加ください。「山吹高原」は第８回インカレのテレインで，地図販売は日本学連です。

③「信州伊那高原　ますみヶ丘」・「信州大芝高原」（いずれも 1:15000）

「信州伊那高原　ますみヶ丘」は第１回ショートインカレのテレイン。前述の「駒ヶ根高原」より車で北に約20分です。「信州大芝高原」は信大農学部の近く，伊那ＩＣより約 2.5kmで，初心者・中級者向けの白く平らなテレインです。

④「菅平高原」（1:15000） パーマネントコース兼用 NEW MAP

現在，作成中の「菅平高原」はＡ３判の大型O-MAP 。本年５月頃，完成予定です。ラグビーの夏合宿で有名な日本のダボス，菅平高原は宿泊施設も充実。今年から長野オリンピックまでの３か年，11月第１週に長野県大会を開催し（1997年は公認大会を予定），ＯＬのメッカを目指します。本年度の大会は，北信越学連主催北信越大会併設のため，北信越学連は大会以降の使用となります。

○地図の取扱い

「国立信州高遠少年自然の家」
国立信州高遠少年自然の家
TEL 0265-96-2525

「山吹高原」
日本学生ＯＬ連盟事務局

「駒ヶ根高原」
長野県ＯＬ協会事務局 ・ 鳥川
TEL 0265-22-6372

その他のＯ－ＭＡＰ
長野県ＯＬ協会理事長 ・ 元木
TEL 0263-28-5127

○合宿届提出先
〒395
長野県飯田市松尾代田７６９－２
シルク荘１－１
鳥川 秀司 気付
長野県ＯＬ協会事務局

■「阪神大震災」多額の義援金ありがとうございました

阪神大震災＝兵庫県南部地震発生から約70余日，3月31日までの間に，日本中のオリエンティアの皆様の暖かいお気持が，累計で 110万円を超える多額の義援金にまとまりました。この中には，最近の日本のビッグ大会にはほとんど遠路足を運んで参加されている韓国の河泰鉉様分も含まれております。

まことにありがとうございました。

義援金の配分等の経過および詳細なご報告は，2月下旬から3月にかけて「ボランティア」として実際に現地で働かれ，また兵庫県内クラブ関係者とも打合せをされた船橋昭一氏にお願いする予定です。あしからずご了承ください。　[編集部]

■長野県OL協会 今後の大会等の予定について

1998年2月7日から長野県オリンピック冬季競技大会が開催されます。長野県OL協会では，OLが将来のオリンピック正式種目になることを祈念し，長野オリンピックを盛り上げるために以下のイベントを計画しています。オリエンティアの皆さんの参加を期待しています。よろしくお願いいたします。

①第16回長野県OL2日間大会<決定>
　と　き：1995年9月9～10日
　ところ：「駒ヶ根高原」・「千人塚」・「信州大芝高原」
　内　容：1日目は R.M.O-サービス 主催の6人リレー大会。2日目は県協会主催の個人戦。昨年に引き続き，ナイトイベントを計画中。
　その他：県協会3級2次公認指導員養成講習会併設。宿泊斡旋あり。予約はお早めに。

②「菅平高原」PCオープン記念
　第1回菅平高原OL大会　兼　第17回長野県OL大会（北信越学連主催　北信越大会併設）<決定>
　と　き：1995年11月3～5日
　ところ：「菅平高原」（A3判 NEW MAP）
　内　容：1日目はトレコース開設とテクニカルミーティング。2日目は個人戦。3日目は菅平地区でのミニ合宿を予定。
　その他：菅平地区3級2次指導員養成講習会併設。宿泊斡旋あり。予約はお早めに。

③第18回長野県OL大会<予定>
　1996年，「山吹高原」リメイクマップで検討中。併設イベント募集中。

④第19回長野県OL2日間大会<予定>
　と　き：1996年11月2～4日
　ところ：「菅平高原」・「根子岳」（B5判程度 NEW MAP予定）
　内　容：併設イベント募集中。

⑤第20回記念　日本OL協会公認
　長野県OL2日間大会<予定>
　と　き：1997年11月1～3日
　ところ：「菅平高原」・「根子岳」・「四阿高原」（B5判程度 NEW MAP予定）
　内　容：長野オリンピック冬季競技大会 100日前イベントとして交渉中。
　その他：北陸新幹線・上信越自動車道開通でますます便利になります。

⑥平成7年度　長野県OL協会
　3級指導員養成講習会
　本年度は2回を予定。第1次講習会は，第1回が国立信州高遠少年自然の家で，5月13～14日。第2回は菅平高原で，日程は未定（5～6月を予定）。第2次は第16回および第17回長野県OL大会に併設します。参加希望者は事務局の鳥川まで。
　また，5月14日には「信州晴ヶ峰高原」で県協会練習会を予定しています。

長野県オリエンテーリング協会
理事長　　元木　悟

====大会要項等の綴じ込みについてお願い====

大会要項の綴込みは，“オリエンテーリング広報誌<O－JAPAN>”を後援として加えていただく（要項・プログラム・成績表等に載せていただく）ことを条件として無料で取り扱っております。本誌は第三種郵便扱いのため綴込みや付録などにはいろいろな制約があります。綴込みをご希望される向きは，必ず次のことをお守りください。守られないと，右記日誌にも書いたとおり発送の大幅な遅れとなります。

□事前に，そしてなるべく早めに電話等でご希望の旨をご連絡ください。
□当方から綴込みの可否・綴込み月・部数などについて，その際または後日ご連絡をいたします。簡単な「後援願い」（書式自由）と要項等のサンプルをお送りください。
□綴込み用の要項は，必ずB4判以下，3つ折りは折って，通常の2つ折りの場合は必ず折らずに当方指定の日必着でお願いします。

■PC情報

［コース休止のお知らせ］
○コース名：岐阜県加茂郡「八百津蘇水峡」
○理由：老朽化のため。

岐阜県オリエンテーリング協会

■編集部より

◇◆1994年（暦年）収支決算報告

［収入］

購読料	¥2,777,950
前年度繰越金	1,146,150
次年度分前受金	(990,000)
雑収入＝寄付金等	134,120
前年度繰越欠損金	(335,382)
計：	¥2,732,838

［支出＝経費］

仕入れ金額＝印刷費等	¥2,706,733
発送費	1,043,855
通信費＝電話料等	9[illegible]
接待交際費	24,000
消耗品費	281,940
雑費	33,536
印刷費等前年度未払分繰越金	(406,217)
同　次年度分未払経費	384,487
計：	¥4,161,822
［差引欠損］	(¥1,428,984)

＊＊＊＊＊＊

◆経費の金額には消費税を含めました。前年度購読料金 3000 円の（93年12月末日までに申し込まれた）方々が約4割，そして印刷費の若干のアップ，何よりも郵便料金の値上げはひびきました。◆赤字の解消への最良の道は，新しいオリエンティア，特に中高年層の開発でしょうか。職域で，地域で，みなさまのお仲間の輪をひろげてください。

◇◆編集部日誌

［3月28日］26日に予定していたカナダツアーの申込書に署名をしていただくため，勤務先の多忙な仕事の合間を縫って25名の参加予定者に発送作業。夜，IOFよりFAX受信。スキーOの五輪種目入り，実現近し!?［4月1日］土曜日は本誌の作業が捗る日，と思いき[illegible]治会の役員構成のことで，半日ほど潰れる。カレンダー完成。［2日］午前中・自治会総会。午後・本誌のワープロ入力。夜，自治会役員会。［5日］有給休暇を使って 95/4 最後の仕上げを試みる。池ケ谷氏にも休暇までとらせて，早くから原稿を用意してもらったのに，予定より10日近くも遅れ，先月号16ページだったためとじ込めなかった「中日東海大会」の締切りを2日ほど延ばしていただく。皆さんに多謝多謝。◆「編集部日誌」こんなかたちで少し続けようと思いますが…。ご意見お待ちします。

―――― 流人 (KOUTE) ――

O－JAPAN　　発行人／田口　昭子
〒234 横浜市港南区日野南7-9-5
TEL.045-891-7004　FAX.045-891-2500
分室=Annex　TEL.0287-77-1977
NIFTY-Serve ID　VYE01053
郵便振替口座（番号）00270-9-46870　（加入者名）O－JAPAN 編集部

購読料
'95.4月～'96.3月　¥3,600
（高校生以下）95年度1年分　¥2,400
クラブ代表者　95年度1年分　¥3,000
1部あたり頒布価格　¥300

編集責任者／田口　肇
Chief Editor:
Hajime Taguchi
Editorial Address:
7-9-5, Hino-minami, Kohnan-ku
Yokohama, 233 Japan